

図書館学教育研究グループ
50周年記念誌

日本図書館研究会
図書館学教育研究グループ

目次

図書館学教育研究グループの歴史 (渡辺 信一)	3
図書館学教育研究グループの 25 年 (高畑 悦子)	6
図書館学教育研究グループ (第 2 次) の 30 年 (柴田 正美)	10
『図書館学教育研究グループ通信』 No.1~No.200 総目次	32
研究例会の発表者索引	73
当研究グループの活動にまつわる思い出	77
伝統への真の理解とは (根本 彰)	78
図書館学教育研究グループでの学び (川原 亜希世)	79
50 年後の図書館学教育研究グループ (岡田 大輔)	81
グループ通信と大学図書館の思い出 (高畑 悦子)	82
異議申し立て、トリックスター、ミネルバのフクロウ (柳 勝文)	85
図書館学教育研究グループの研究例会への参加 (北 克一)	86
図書館学教育研究グループに助けられて (前川 和子)	87
個人的な思い出 (漢那 憲治)	89
図書館学教育研究グループへの期待 (糸賀 雅児)	91
大学基準協会の図書館・情報学教育基準について (高山 正也)	93
「状況に埋め込まれた」学びの共同体としての研究グループ活動 (枝元 益祐)	96
図書館学教育研究は成り立つか? (小田 光宏)	98
図書館学教育研究グループと私 (田窪 直規)	100
歩み続ける図書館学教育研究グループ (坂下 直子)	102
研究グループの立ち上げと近畿地区図書館学科協議会 (塩見 昇)	104
コロナ禍の図書館学教育研究グループ (高池 宣彦)	106
大学時代から図書館情報学と関わって、今思うこと (岩崎 れい)	108
図書館学教育を考える場の大切さ (坂本 俊)	109
省令科目への絶えざる取組と記録作成への表敬 (志保田 務)	111
学校図書館利用の思い出 (梅原 由美子)	112

図書館学教育研究グループの歴史 日図研 50 年史から

渡辺 信一

<沿革>

当研究グループは、1972 年 12 月理事会で承認された。当時、日図研事務局長であった高橋重臣氏により結成されたものである。その頃の時代的背景としては、「図書館学教育改善試案」（『図書館雑誌』66(2) 1972.6）が図書館学教育関係者のみならず、広く図書館界全体にわたって議論を呼ぶところとなり、翌 1973 年の 3 月には、「図書館学教育を考える」というテーマのもとに、同案についての公開討論会（『界』25(2) 1973.8）開催を控えており、おのずと会員の結束が求められる情勢にあった。しかしながら、当時、日図研は、“未曾有の財政危機”にあり、高橋氏は職掌上、研究調査費（年額 1 万円）の執行も苦慮された（実際、支出せず）こと、その他の理由から、研究会の諸活動も困難を極めたようである。そのようなこともあって、グループ研究発表も、わずかに 1977 年度研究大会において、高橋氏が小倉親雄・森耕一両氏らと協議して、「図書館学教育の現状を考える」というテーマでの発表（『界』30(1)）が、記録に残されている程度である。

しかるに 1986 年 12 月に及んで近畿地区図書館学科協議会の席上、「時代の要請にそった”司書講習規程の改正を研究・準備し、かつ文部省に積極的に働きかけてはどうか」という塩見提案がなされた。これを機に当研究グループが、1987 年 2 月に“再発足”するところとなり、今日に至っている。

<構成／事務局>

会員は主として養成の立場にある者が多数を占めるが、図書館情報学の研究/教育もさることながら、情報化時代、生涯学習社会に求められる図書館員養成をめざして、共通理念を構築し、現実の問題に対処することを主たる目的としているところから、養成者である/なしを問わず、会合への参加を歓迎している。

事務局: 京都市上京区・同志社大学司書課程資料室内

<活動／取り組みテーマ>

研究例会は、原則として隔月（主として奇数月の第 4 土曜日、午後 2 時から）ごとに上記、同志社大学において行われている。例会の報告は記録編集幹事の柴田正美氏

による『図書館学教育研究グループ通信』(隔月刊)が刊行され、現在 69 号に至っている。また、『界』にも当研究会の活動報告は随時、掲載されている。それらに加えて、2月の研究大会第1日でグループ研究発表が行われる。これまでの主たるテーマは、「司書養成科目<省令>改訂について」(1988)、「わが国における図書館学教育の動向: 近畿地区の開講大学における教育改善の現状調査/専任不在の大学・短大の問題点/専任の図書館学教育担当者の状況」(1989)、「省令科目『情報管理』の現実と期待/(同科目の)教育の現状と課題」(1990/1991)、「『司書・司書補講習の科目の内容』改正-最近の動き」(1992)、「わが国における図書館学教育の動向」(1994)というように、一貫して文部省のカリキュラム改定の動きと関連するテーマとなっている。これは、当研究グループが、「再発足”時において、「任務・方針として、(1) 図書館法施行規則にもとづく司書講習科目について単位数および組み立ての変更をも含む科目内容の見直し、(2) 近畿地区において学科レベル以上の図書館学開講大学を実現する、の2つを挙げた。後者については、どのようなカリキュラムをもち、教育の目標をどこに置くのかという根本的な課題から、受け皿としての大学組織そのものの可能性の有無など幅広くかつ現実とのつながりをもった検討を必要とするので、長期的課題と設定し、当面は、前者の司書養成にかかわる部分を取り上げることにした」(『界』40(2) 1988.7, p.70) ことによるものであり、同時に緊急性を優先するものであった。

現在、司書養成のためのカリキュラム改定(試)案として、「日図協案」(柴田正美氏に負うところが大であるところから「柴田案」ともいう)が存在するが、同案は当初、当研究グループの地道な勉強学習会から始まり、のちに日図協・図書館学教育部会(幹事会)/研究集会、全国図書館大会(<図書館員養成>分科会)、日図協・各種役員会、全国の会員への提案・検討/討議・承認、文部省でのヒアリングを経て今日に至っている。今後、予想される文部省・生涯学習審議会の答申への足がかりとなることを切望するところである。

例会における、これまでの個人発表については、例えば、以下のとおりである: 「学部レベルのカリキュラムをさぐる」(石塚栄二氏)、「学生交流の場の提案」(塩見昇氏)、「図書館実習について」(渡辺信一氏)、「柴田<カリキュラム>試案について」(柴田正美氏)、「図書館学教育と障害者サービス」(天満隆之輔、深井耀子、服部敦司各氏)、「博物館学芸員課程について」(田窪直規氏)、「大学図書館員養成のためのカリキュラム」(岩猿敏生氏)、「図書館専門委員会 1991 年 6 月案批判」(柴田正美氏)、「近畿地区公立図書館における試験問題について」(柴田正美、埜上衛各氏)、「生涯学習振興策に関わる中間報告について」(塩見昇氏)、「サーチャータ試験について」(戸田光昭氏)、

「学校図書館の職員制度と養成のあり方」(佐野友彦氏)、「大学図書館職員の現状と養成」(鍵本芳雄氏)、「専門図書館員とその養成」(中井正子氏)、「九州大谷短大の情報司書コース」(二村健氏)、「情報処理技術の展開に基づく図書館情報学教育の高度化」(倉橋英逸氏)等々。

「授業実践報告」としては、「図書及び図書館史/資料目録法/図書館資料論」(村田修身氏)、「情報管理」(山田泰嗣、大城善盛各氏)、「図書館情報学概論」(塩見昇氏)、「資料整理法特論/非図書資料の管理」(山本貴子氏)、「視聴覚教材:ビデオ等を利用したの図書館教育」(佐藤毅彦氏)などである。

<要望書など>

当研究グループは、研究団体であると同時に運動体としての取り組みも求められるところであるが、これまで近畿地区図書館学科協議会(塩見昇氏)より「司書養成科目(省令)改定につき文部省への働きかけについて(要請)」(1986年12月)を皮切りに、社会教育審議会ワーキング・グループの「司書及び司書補の講習内容見直しのための素案」が成案となった場合の危機感から提出した「要望書」(1990年4月)、「大学院前期(修士)課程における特別選抜試験(いわゆる『飛び級』入試)合格者が司書資格取得を断念しなければならない事態について(要望)」(1991年5月)など、日図協・理事長/図書館学教育部会長あて<要望書>を提出してきた。それらは全国図書館大会なり、日図協・理事長を通して文部省当局なりへの意志表示となり、一定の成果は収められたものと思われる。また、図書館員養成に関心をもつ、全国の諸氏へのいささかの問題提起ともなっていると確信するところである。

日図研の五十年にわたる歴史と伝統のなかで、“再発足”から数えると、いまだ十年に満たぬ研究グループではあるが、21世紀における図書館員の養成/図書館学教育をめざして、さらに歩み続けねばならない。

この原稿は、『図書館界』48(4), 1996.11, p.240-241 から許可を得て転載した

図書館学教育研究グループの25年

高畑 悦子

当研究グループは、図書館情報学教育の在り方について考察することにより、図書館業務の改善に資することを目指して活動している。この報告では、1996年3月から2021年3月までの25年間を主たる対象とする。

1972年12月に活動を開始しその後活動を休止(第1次グループ)したが、1987年2月、近い将来の司書講習に係る法令改正に向けて準備をするため第2次の研究グループが発足した。この間の活動は、日本図書館研究会(以下、日図研)50年史の渡辺信一氏による報告を参照されたい(『図書館界』48巻4号p.240-241)。また、「図書館学教育研究グループの30年」と題して、柴田正美氏が日本図書館文化史研究会第35回全国大会(2018年9月)にて発表されている。

〈研究活動/参加者〉

当研究グループは、図書館員養成及び現職者研修の充実をめざして、共通理念を構築し、現実の問題に対処することを主たる目的としている。そのため、参加者は養成を担当する教員職の人が多い。だが、その時々々の研究テーマによって、対象の館種の現場で勤務する人や関心を持つ人々が参加しており、グループとして幅広い方の参加を歓迎している。

研究活動は2ヶ月に1度の研究例会の開催を基本としている。参加者全員で研究課題、研究計画を討議し、その内実を作り上げるという方法でテーマを決定している。毎回の研究例会は、その回の担当者が発表し、参加者が意見交換をする「研究・討議」で構成されている。日常的な研究例会活動を基に、日図研研究大会でグループ発表を行っている。

研究例会は、通常奇数月の土曜午後に開催している。会場は当初は同志社大学、その後龍谷大学大宮学舎を主としていたが、2020年の新型コロナウイルス感染拡大により、同年5月からオンライン開催に変更している。研究例会の案内は、『図書館界』誌上及び日図研ホームページで告知をしている。

研究例会は2021年9月で201回を重ねている。毎回の例会等は記録を作成し、『図書館学教育研究グループ通信』(以下、『通信』)として翌回の参加者に配付している。『通信』は212号を数えている。また『図書館界』誌上の研究グループ活動報告にて、例会の内容を要約して公開している。

〈運営/事務局〉

研究活動は、グループ代表幹事(現在はグループ代表)、庶務幹事(庶務担当)、記録編集幹事(記録担当)を設定して運営している。グループ代表幹事は第2次発足当初から渡辺信一氏が務められたが、2005年7月から柴田正美氏(渡辺氏は2016年5月まで顧問)、そして2018年9月より川原亜希世氏が務めている。庶務幹事は2001年度から、柳勝文氏が担当している。記録編集幹事は柴田正美氏が『通信』1号から100号までを担当し、101号から枝元益祐氏に交代、その後中島幸子氏等を経て、189号(2017年7月発行)から高畑悦子が担当している。

〈活動/取り組みテーマ〉

この25年間は、「図書館法」「図書館法施行規則」、「学校図書館法」「学校図書館法施行規則」「学校図書館司書教諭講習規程」といった、戦後の図書館専門職員を規定した法律やそれに基づく省令の改正という、大きな変化が続いた時代であった。司書のカリキュラムは2度改定され、「学校司書のモデルカリキュラム」も新設された。

法律改正に向けてカリキュラム案の検討と発表・提案、新たな養成課程への改正後は新規科目のシラバス案、授業研究としての事例発表や、教科書の比較検討を行うとともに、社会の変化に伴う教育内容の見直し等をその時々の研究活動とし、日図研研究大会にてその成果を発表している。

〈研究活動及び発表:年代順〉

1996年の司書課程の変更に関する取り組み

1993年以来、生涯学習審議会社会教育分科会計画部会によって司書資格取得のための講習科目の改定検討等が行われてきた。1996年4月図書館法改正で、司書講習科目の総単位数が20単位以上となり、8月文部省(当時)は「図書館法施行規則の一部を改正する省令」を公示し、1997年度からの司書・司書補講習は新カリキュラムで実施されることとなった。

この間、科目改正について研究を続け日本図書館協会図書館情報学教育部会(以下、JLA教育部会)での発表等もおこなってきた当グループは、日図研創立50周年記念大会にて「21世紀に向けての図書館学教育-生涯学習審議会社会教育分科審議会の『報告』をめぐって」(1996年)を発表した。公示された新カリキュラムには新規科目があり、単位数も増加する。養成現場の状況を知るため、新カリキュラムへの移

行に関するアンケート調査の実施や、「図書館経営論」の授業実践報告等を行った。

学校図書館で働く人に関する取り組み

教育の情報化の進展，新学習指導要領に総合的な学習が導入されるなど，学校図書館の機能高度化が求められる状況となった。1997年，学校図書館法改正が公示され，2003年3月までに，12学級以上の学校において，司書教諭が発令されることとなった。「学校図書館司書教諭講習規程」の見直し及び大量の司書教諭の養成・発令が急がれることとなり，能力が不十分な司書教諭が養成されること，充て職で司書教諭が配置され，一方で学校図書館の事務職員や司書の雇用が維持できるかが危惧された。

当グループでは「学校図書館を考える会・近畿」と共同研究を進め，研究例会で大阪府内の司書教諭の配置状況調査や，司書教諭の現職者や経験者による司書教諭業務等の研究を行った。その後も学校図書館を主要テーマとして司書教諭科目の見直し，司書教諭講習科目改正が公示された後は，新規科目の授業案や教科書比較等をテーマとした。研究大会では，「図書館法・学図法改正にかかわる養成教育の現状と問題点」(1998年)/「わが国における学校図書館司書教諭養成にかかわる諸問題：平成11年度からの新カリキュラムへの移行を中心に」(1999年)/「学校図書館職員の現状と課題：近畿地区学校図書館実態調査を養成の立場から分析する」(2001年)を発表した。その後も，アンケート調査結果報告，事例分析に基づいた学校図書館の役割と教育への貢献，移行期の現職者研修，司書教諭の発令状況と養成，養成科目の教科書について研究発表を行っている。

講習中心から大学科目中心へ：2008年の司書課程の変更に関する取り組み

2006年，教育基本法が改正され，それに伴って社会教育法や図書館法の改正が行われた。2008年，図書館法，その後図書館法施行規則が改正され，インターネット時代の司書課程の科目見直しとともに，単位数が24単位に改定された。戦後の司書養成において長く課題とされてきた，「大学における図書館に関する科目」が図書館法第5条1項1号で規定され，従来の司書講習科目が2号となった。この改正に向けて図書館情報学教育，養成と研修の在り方，館種ごとの専門性の研究がJLA教育部会等でも進められた。当グループでは，大学の司書課程の科目や単位数などの実態調査を行い，ほとんどが25単位以上で開講されているという実態や新たなカリキュラム案，大学科目としての図書館学教育科目の意義，各大学での工夫や状況等を研究，発表している。また2008年2月にはJLA教育部会の研究集会と共催で，情報専門職，

司書養成に関する研究例会を開催している。日図研研究大会では、「1996年カリキュラムの諸問題と今後の展開」(2007年)、2008年以降は「司書養成制度の諸問題と今後の展望」、法改正後の新「司書養成カリキュラム」と、実施までの移行にあたっての課題(2009年、2010年)をテーマに発表を行った。省令科目の歴史研究にも取り組み、2011年に「省令科目の成立に影響を与えた諸要因について」を発表した。

学校司書のモデルカリキュラムに関する取り組み

2012年、「学校図書館を支える人」について研究を始め、司書教諭・学校司書の2職の在り方について提言している。2014年、学校図書館法改正により学校司書が法制化されると、学校司書の役割や養成科目案及び各科目の内容の検討・提案を行った。2016年「学校司書のモデルカリキュラム」が公示された後は、モデルカリキュラム科目のシラバス分析や各大学の実施状況調査の研究活動を行っている。

その他の取り組み

海外の図書館情報学教育や基準についての報告はこの期間を通じてなされてきた。また近畿圏以外から講演者を招待することも行ってきた。

新たな取り組み

2019年度から年一回、情報組織化研究グループと、情報資源組織の授業やBSHについて合同例会を開催しており、今後も継続を予定している。

2020年、新型コロナウイルスの感染拡大により、対面授業が行えない状況となった。研究例会では司書課程の遠隔授業をテーマにオンラインで情報交換を行い、その成果を研究大会で発表した。新たな状況での司書の能力とその養成について研究に取り組んでいる。

この原稿は、『図書館界』73(4), 2021.11, p.266-267 から許可を得て転載した

図書館学教育研究グループ(第2次)の30年

柴田 正美

(三重大学名誉教授)

1 図書館学教育研究グループは2次に分かれる

「図書館学教育研究グループ」という名前のグループは2つ存在する。両者に連続性はなく、2つのグループの間には、かなり長い不存在の期間があった。また、前者は後者の存在すら知りえない立場にあった。

前者は、仮に「第1次」と名づけておくと、1972年12月に活動を開始し、当時、天理大学にいた(のちに図書館情報大学、筑波大学に移られた)高橋重臣さんや、京都大学の附属図書館事務長の岩猿敏生さんなどが、中心的に活動されていた。研究テーマは、「図書館学教育の現状を改善する方向を探る」ということを掲げ、司書の養成をベースに置きながらも、図書館学の研究をより深めようとする考え方が強かったようである。

ただ、残念なことに、第1次のグループについては、記録が残されておらず、活動の実態を十分に把握することができない。研究活動そのものは1978年頃まで継続されていたようである。意図して休止したわけではなさそうであるが、結果として休止期間に入った頃は、図書館短期大学の図書館情報大学への移行期と重なっており、「図書館学」の本質や、「情報学」との関わりなどが論議されたり、図書館関係者以外からの関連した発言があるなど、かなり揺れ動いていた時期にあたる。このことについて影響を把握する方法が存在しないのが実情である。

「第2次」の活動が開始されたのは、1987年2月であった。

前年の1986年12月、近畿地区図書館学科協議会の席で、大阪教育大学の塩見昇さんが、社会教育審議会成人教育分科会で、社会教育主事の養成方法に関する論議が進んでおり、いずれ司書についても改定方針が出されるだろうから、先んじて論議を始めることを提案したのがきっかけであった。(社会教育主事の養成については、1987年2月10日官報で、社会教育主事講習等規程の一部を改正する省令が公示され、大学における科目の改訂は1988年4月から実施された。)

この提案を契機に、日本図書館研究会の研究グループとして活動することとなった。第2次の研究グループのターゲットは、二つが挙げられている。

一つは、社会情勢の変化に対応した司書養成のあり方で、講習科目をどうするかを検討するものであった。

二つ目は、近畿圏に学科レベルの「図書館学科」を設置する可能性について論議を深めることである。

前者では、講習主体か大学・短大での教育課程主体か、必要な単位数などが話題となり、後者では、当時、花形的要素をもっていた「情報学」との関わりや、図書館学プロパーの研究者・教育担当者との連携方法などが検討される。

二つのターゲットは、研究活動を展開するなかで、司書養成カリキュラムの検討について、養成だけに視点を置くのではなく、図書館学教育全般へと拡張され、大学課程での図書館学から大学院レベルの図書館学を検討する方向へと展開する流れが作られ、統合的に認識されるようになってゆく。

2 研究活動は、どのように展開されたか

1987年2月に始まった研究活動は、参加者の誰かが準備した「研究発表」と、それらを素材に、参加者の意見が交換される「研究・討議」で構成された。研究・討議を背景として発表がさらに深められ、同一のテーマによる「Part 2」が準備された例もあった。

研究活動は、当初は「会合」と称していたが、「研究会」と唱えるようになり、さらには定期的開催を踏まえて「研究例会」とされる。「研究会」というようになってからは、発表者の個人的研究業績としてもカウントされることが一般的になったようである。(以下では、時期にかかわらず、これらすべてを「研究例会」と称する。)

そうした研究活動をとりまとめる形で、年に1回開かれる日本図書館研究会の「研究大会」において「グループ研究発表」が行われる。

研究活動の計画は、毎年、3月から5月あたりに開かれる研究例会において参加者全員で検討することになっている。個人的興味で作られる「研究課題」を追求するのではなく、「グループとしての研究活動」という面を重視し、参加者全員で研究課題を考え、その内実を作り上げるという方法を採用している。この方式を守ってきたがゆえに、30年の歴史を積み上げることができたのだろう。

3 研究例会の実相

3.1 研究例会の「予告」と「記録」

研究例会は、2か月以上前に設定され、日本図書館研究会の機関誌『図書館界』で予告される。日時・場所・発表者・テーマが明らかにされ、「発表概要」も示される。『図書館界』の予告を見て、研究例会参加・出席を決める人もかなりあり、毎回、研究発表の内容に関心をもった異なったメンバーが集うことになる。そうした広報活動が研究グループの活性化に役立っている。しかし、「継続的に研究を展開する」ということが難しい面を生み出している。

研究例会の会場は、発表者の都合の良い場所を前提としながらも、多く使用されたのは同志社大学の司書課程資料室・教室であった。最近では、龍谷大学の宮学舎を利用する機会が増えている。同志社大学は、渡辺信一さん、龍谷大学は、柳勝文さん、のご尽力で借りることができてきた。

例会が終わると、発表者は、発表内容をとりまとめ、『図書館学教育研究グループ通信』(以下、「通信」という)の記事が作られる。また、「通信」編集担当者は、発表後の「研究・討議」部分の要約記録を作成し、「通信」に掲載する。「通信」は、翌回の研究例会参加者に配布される。「翌回配布」という方式には問題がある。それは、それぞれの回の発表内容が、前回は継続しているわけではないので、配布を受けた参加者にとっては、不要な情報となる可能性がある、ということである。せっかくの情報が捨て去られてしまう可能性が高い。

また、「通信」の要約を、「通信」編集担当者の責任で、『図書館界』に「研究グループ研究例会報告」として掲載し、日本図書館研究会の会員を対象として公開している。

こうした流れは、第1回の会合で、当時の中心メンバーから提案され、了承が得られており、研究グループ30年の記録を作成するのに大いに役立った。2022年5月からは『図書館界』への掲載は取りやめ、日本図書館研究会のホームページにおける公開となった。

3.2 研究例会と研究大会の「グループ研究発表」

数回の研究例会において共通する発表テーマが取り上げられる場合(意識的に、計画的に連続させることもあった)、年間テーマとして設定し、翌年の日本図書館研究会

研究大会において「グループ研究発表」を組み立てることとなる。その発表記録は、以下のようにになっている。個々の発表内容は、日本図書館研究会『図書館界』の「研究大会特集号」で把握することができる。

「第1次」研究グループの成果として

第19回 (1978年2月) 図書館学教育の現状を考える：わが国の教育担当者の問題を
中心に

という研究発表がされている。

「第2次」研究グループになると次のようになる。

第29回 (1988年2月) 司書養成科目<省令>改訂について：その動きと改訂試案
(報告)

第30回 (1989年3月) わが国における図書館学教育の動向：図書館員養成の現状と
課題について

第31回 (1990年2月) 省令科目「情報管理」の現実と期待

第32回 (1991年2月) 司書養成課程における「情報管理」教育の現状と課題：社教
審WGの改定方針にかかわって

第33回 (1992年2月) 「司書・司書補講習の科目の内容」改正：最近の動き

第34回 (1993年3月) 公立図書館の採用試験に関する一考察：近畿地区公立図書館
アンケート調査をもとに

第35回 (1994年2月) 省令科目内容の現代性について

第37回 (1996年2月) 図書館学担当者の意識調査より現状と問題点をさぐる

第38回 (1996年11月) (創立50周年記念大会) 21世紀に向けての図書館学教育-生
涯学習審議会社会教育分科審議会の『報告』をめぐって

第39回 (1998年3月) 図書館法・学図法改正にかかわる養成教育の現状と問題点

第40回 (1999年2月) わが国における学校図書館司書教諭養成にかかわる諸問題：
平成11(2001)年度からの新カリキュラムへの移行を中心に

第41回 (2000年2月) 学校図書館司書教諭養成カリキュラムの現状と課題：アン
ケート調査を終えて

第42回 (2001年3月) 学校図書館の役割と教育への貢献：事例分析に基づいて

第43回 (2002年3月) 現職者研修と養成サイドの取り組み

第44回 (2003年3月) インフォメーション・パワーの教育現場における適応につ

いて

- 第 45 回 (2004 年 2 月) 司書教諭の発令の現状と課題ならびに養成について
- 第 47 回 (2006 年 2 月) 司書・司書教諭養成課程の FD
- 第 48 回 (2007 年 2 月) 1996 年カリキュラムの諸問題と今後の展開
- 第 49 回 (2008 年 2 月) 司書養成制度の諸問題と今後の展望
- 第 50 回 (2009 年 2 月) 司書養成カリキュラムの今後、展望
- 第 51 回 (2010 年 2 月) 新カリキュラムおよびそれへの移行にあたっての課題
- 第 52 回 (2011 年 2 月) 省令科目の成立に影響を与えた諸要因について
- 第 53 回 (2012 年 2 月) 司書教諭養成科目の教科書について
- 第 55 回 (2014 年 2 月) 学校図書館専門職員 (学校司書) の養成についての提案
- 第 56 回 (2015 年 2 月) 学校司書カリキュラムについて考える
- 第 57 回 (2016 年 2 月) 学校司書養成カリキュラムについての各科目の内容の検討

3.3 研究例会の回数

研究例会は、2022 年 11 月に第 206 回を開いている。ほかに通し番号からはずれた会合を「臨時研究例会」などと称して、開いている。つぎのようなものがあった。

- ① 司書資格のカリキュラムを検討していた社会教育審議会の答申を受けて開いた例
- ② 文部科学省の学校司書のモデルカリキュラム案を素材にした例
- ③ JLA (日本図書館協会) の「学校図書館職員問題検討会報告書」の内容について調べた例
- ④ Mahasarakham (マハサラカーン) 大学のポーンピモン教授に話してもらった例

ほかに、通常の研究例会だけでは不十分だと考えて研究大会の発表だけを目的にした

- ⑤ 準備会 (参加者は、当該テーマで、これまでに研究発表をした人なので、公開性は低くなる) など、

である。

これらを合わせると、210 回を達成し、年に 6 回程度の研究例会をもったことになる。

4 「研究発表」を分析する

4.1 研究発表の件数

それぞれの研究例会は、研究発表と、それを素材とする「研究・討議」で構成されてきた。1回の研究例会で、複数の研究発表がされたこともある。

「第2次」が発足してから30年が経過した2018年7月までの研究発表「延べ数」は、349件となっている。

4.2 研究発表を担当した人

発表を担当した人は、かなりの部分が、大学(短大を含む)の司書課程・司書教諭課程・図書館学・情報学担当の教員であった。

ほかに、

- 博物館員 (のちに大学教員になった)、
- 全国 SLA 事務局長 (のちに大学教員になった)、
- 専門図書館職員 (2人いるが、どちらも、のちに大学教員になった)、
- 学校司書 (5人)、
- 国際日本文化研究センター職員 (のちに大学教員になった)、
- 小学校教員 (4人、うち3人までが、のちに大学教員になった)、
- 大学院生 (のちに大学教員になった)、
- 京都府立資料館職員 (のちに大学教員になった)、
- 大学図書館員 (2人、うち1人は、のちに大学教員になった)、
- 教育委員会職員 (のちに大学教員になった)、
- 中学校教員 (2人)、
- 高校教員

などで、発表当時の職としては、バラエティーに富んだ人材が研究例会に参加していたことを示している。けれども、()書きで触れたように、その多くが「のちに大学教員になった」人で、自主的な研究組織としては特異な面となっている。

4.3 どんな研究テーマが取り上げられたか

研究発表の件数は、すでに述べたように「349件」であるが、一つの発表で、二つ以上のテーマに触れているものもあり、それらを、それぞれに触れたものとして整理すると、つぎのようになる。(カウントできる件数は、429件まで膨れ上がる)

- もっとも多いのが省令科目を扱う養成カリキュラム (85件) である。
- つぎは、教科書研究をも含む教育実践報告 (78件) で、
- 第3位は、他団体の会合・活動報告で (52件) にも達する。
- 学校図書館の機能・働きなどに触れたのは (38件) で、第4位となる。
- 養成課程を除く大学における教育活動や研修については、(29件) を数える。
- 学校司書の養成について触れたのは (28件) に達している。
- 公共図書館のみの司書養成に言及した研究発表は (15件)、
- 司書教諭の養成を課題とした発表は (14件) となっている。
- なお、その他が (20件) あるが、ここには海外事情の報告などが含まれている。

この整理結果を見ていると、司書・学校司書・司書教諭の養成と、そのカリキュラムを研究課題とした場合が非常に多いことが分かる。(カリキュラム: 85件、学校司書: 28件、公共図書館司書: 15件、司書教諭: 14件、合計142件は全体429件の33%に達する。) 関連する、教科書研究や、カリキュラムの内実を問題にする授業実践報告78件を合算すると51%を超える。

研究例会の参加者が、大学教員を中核としているので当然なのかもしれない。しかし、先に述べたように、発表当時の発表者の立場はバラエティに富んでいるので必ずしも大学教員が牽引車になっているとは言えないであろう。むしろ、研究および研究発表の方向を、あらかじめ設定しておかず、参加者の意見を聴きながら決めていくという「いかにも民主的」方法が、結果として、こういう傾向を生み出していると考えべきだろう。

4.4 どんな養成関連科目が注目されているか

78件の研究発表がされている「教科書研究・授業実践報告」では、どのような科目がとりあげられているかを見てみる。

読書と豊かな人間性	8
学校図書館メディアの構成	6
学校経営と学校図書館	5
情報メディアの活用	5
図書館利用論	4 (図書館利用教育を含む)
学習指導と学校図書館	3
図書館概論	3 (図書館通論、図書館情報学概論を含む)
図書館経営論	3 (図書館制度・経営論を含む)
児童サービス論	2
情報検索演習	2
情報資源組織論	2 (演習を含む)
図書の整理	2
図書館資料論	2
図書館情報技術論	2
図書及び図書館史	2
その他	各1 (コミュニケーション論、学校図書館情報サービス論、資料整理法特論、資料分類法、情報サービス論、図書館実習、専門資料論、非図書資料の整理)

いかにも、学校図書館関係の科目が多いことが目立つ。

4.5 発表者と、扱ったテーマの流れ

30年あまりの間に、研究例会で発表をした人数は、ちょうど、100名に達している。多いのは、第2次初代の代表を務めた渡辺信一さん(49件)であり、私(60件)である。どちらも、日本図書館協会(JLA)の図書館学教育部会の役員をつとめており、その関係での発表や報告が数多いと見受けられる。

5件以上の発表をしている人を挙げると、つぎのようになる。(氏名の五十音順、敬称は略)

- 石塚栄二(8件)、

- 岩猿敏生 (8 件)、
- 枝元益祐 (9 件)、
- 岡田大輔 (13 件)、
- 川原亜希世 (13 件)、
- 塩見昇 (16 件)、
- 頭師康一郎 (7 件)、
- 田窪直規 (8 件)、
- 平井むつみ (7 件)、
- 松崎博子 (7 件)、
- 村田修身 (9 件)、
- 柳 勝文 (13 件)、
- 山田泰嗣 (7 件)

こうして見てくると、つくづく幅の広い人たちによって、このグループは支えられていたことに改めて気づかされる。

4.6 研究例会で発表されたテーマの推移

テーマと時期を組み合わせてみてゆくと、次のような結果を得ることができる。

429 件のテーマを、分類し、それらのなかでの発表時期を組み合わせて見てゆくと、次のようなことが判明する。アンダーラインを付した部分は、集中的に取り上げられた時期と件数を示す。

- 学校司書養成 (28 件)
 - 1994 年から取り上げられているが、2012 年から特に多くなっている。
 - 2014 年～2016 年にかけて集中的に研究されたのは、学校司書を学校図書館法のなかに位置づける政策と関わりがあるだろう。
 - 1994、2012(2)、2013(2)、2014(8)、2015(7)、2016(7)、2017
- 大学図書館司書養成 (2 件)
 - 1988、1994
 - 意識して取り上げている傾向は見られない。
- 公共図書館司書養成 (15 件)
 - 1990、1992(9)、1993、2001、2002、2007、2008

- 1992年には採用試験問題を集中的に検討した時期にあたる。
- 司書養成カリキュラム (95件)
 - 1987(9)、1988(4)、1989(2)、1991(3)、1992(4)、1993(5)、1994(5)、1996(10)、1997(2)、2001、2006(3)、2007(5)、2008(2)、2009(7)、2010(5)、2011(2)、2013、2014(2)、2015(4)、2016(7)、2017(2)
 - 当然ではあろうが、研究対象に引き続いてなっているようだ。
 - しかし、1995、1998、1999、2000、2002、2003、2004、2005年には取り上げられていない。なぜだろうか。
- 司書教諭養成カリキュラム (14件)
 - 1996、1997、1998(2)、1999、2000、2002、2003(4)、2007、2009、2011
- 情報専門員の養成 (4件)
 - 1991、1994(2)、1995
- 司書教諭のあり方など (7件)
 - 1999(3)、2003(3)、2004
- 公共図書館の現況報告など (7件)
 - 1987、1991(2)、2001、2007(3)
- 学校図書館の現況報告など (48件)
 - 1989、1997、1999、2000(10)、2001(4)、2002、2003(5)、2005(2)、2006、2007、2009(2)、2012(2)、2013(4)、2014、2015、2018
- 大学図書館の現況報告など (7件)
 - 1997、2007、2008(5)
 - 2008年の発表は一つの発表を5人で分担したものである。
- 教育実践報告・教科書評価など (78件)
 - 1989(7)、1990(5)、1995(6)、1996(2)、1997(3)、1998(5)、1999(7)、2000(4)、2001、2002(3)、2005、2006(4)、2008(3)、2009(2)、2011(4)、2012(7)、2013(5)、2014、2015、2016(2)、2017(4)、2018
 - 関心が高く、ほぼコンスタントに発表が準備されている。
 - 発表のなかった年は、他のテーマに食われてしまったというべきだろう。
- 情報処理教育・情報リテラシーなど (4件)
 - 1990、1993、2001(2)
 - 2001年の発表は2人の分担であり、実質は1件である。
- 各種団体の会合報告など (52件)

- 報告だから年次別の件数よりは関係団体名が重要であろう。
 - JLA 全国図書館大会 (9)、JLA と文部省 (文部科学省) の関係 (3)、JLA 図書館学教育部会 (25)、社会教育審議会 (4)
- 総括的かつ一般的な情勢報告 (4 件)
 - 年次別に示しても意味をもたない。
- 各種の図書館活動 (11 件)
 - 同上
- 図書館関係科目を含むカリキュラム全般を扱ったもの (4 件)
- 教育活動 (29 件)
 - 内容としては、図書館学科づくり、現職者研修、FD などである。
 - 1988(2)、1989(3)、1994、1995(2)、1996(3)、1999、2000、2001(2)、2002(2)、2003(3)、2004(2)、2005(3)、2006、2007、2009、2013
 - 2005 年と 2006 年が FD を扱っている。
- その他 (20 件)
 - グループ運営方針について、学術用語、海外における図書館学教育の状況 (タイ、アメリカ合衆国)、アメリカの利用教育、小倉親雄のデューイ関連論文、小野則秋の業績、青木次彦の業績など
- 大学設置基準など (9 件)
 - 他大学の単位認定に関する制度
- 他大学の状況 (3 件)
 - 愛知淑徳大学、東洋大学などを紹介。
- 専任不在問題 (6 件)
 - 図書館学担当教員として専任がないとどのような事態が発生するか。
- 図書館学関連大学院 (2 件)
 - 大阪市立大学大学院が紹介されている。
 - なお、本グループ関係者が在籍している大学院は、つぎのとおり。
 - * 三重大学人文学部 (1992 年 4 月開設)
 - * 大阪教育大学 (1993 年 4 月開設)
 - * 大阪市立大学
 - * 同志社大学
 - * 立命館大学

5 アンケート調査

当グループは、多くのアンケート調査を実施してきた。それらの概要について触れることとする。

多くの調査は、全国を対象とする悉皆調査ではなく、地域を「近畿」と限定したり、面接が可能な人に限ったりしており、予備調査的な役割を担うものであった。当グループでの調査がきっかけとなって大規模な調査を始める機会へとつながることが期待されていたが、その実現にはいたっていないものが多い。

以下では、(発表時期)、No.: 「通信」の号数、調査の年月、調査の対象、調査内容の特色ないし特記すべきところ、調査結果の報告事項などを示しておく。

近畿地区司書有資格公立図書館長に対するアンケートの報告 (1987年5月) No.2

- 1987年3月
- 司書資格をもつ公立図書館長 (滋賀 9、京都 7、大阪 24、兵庫 16)
 - － 回答は 38 (67.9%)
- 現行科目のなかで「不要と考える」「重点をおいてほしい」科目について
- 第2回研究例会において渡辺信一さんが報告

図書館学関係科目の位置づけ等に関する調査結果 (1987年12月) No.7

- 1987年11月
- 近畿地区図書館学科協議会に参加する42の大学・短期大学
- 図書館学科につながる芽があるかどうかを調査
- 1987年12月の協議会席上で報告された (本グループの『通信』No.8に概要が示されている)

公立図書館の採用試験問題について (1992年4月および7月) No.42 及び No.43

- 桒上衛さんからの実態についての問題提起があった
 - － 分類問題ばかりを連続出題
 - － 扱うことの少ない書誌学上の語句の説明要求
 - － 相互に関連性の少ない多数の設問

- － 実務と関連のない問題
- 出題公立図書館名が明らかな 1455 題を分析: 柴田正美担当
 - － 現行カリキュラムの内容の一部が、まったく取り上げられていない
 - － カリキュラムにない「図書館の自由、プライバシー保護、MARC、学術情報システム、障害者サービスなど」が設問されている

公立図書館の採用試験に関するアンケートについての報告 (1992 年 12 月) No.46

- 調査方針の検討を行っている (1992 年 9 月) No.44
 - － 調査の担当者は、倉橋英逸さん、柴田正美、山田泰嗣さん、渡辺信一さん
- 三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山の 2 府 5 県
 - － 県立 7、市 95、町村 52 の合計 154 自治体を対象に調査
- 回答があったのは
 - － 県 5 (71.43%)、市 66 (73.33%)、町村 33 (63.46%)
- 実施状況、受験資格要件、採用試験を実施していない自治体での配置方法、最近の競争率など実施状況、試験区分と配点、試験問題作成担当者、作成の意図、内容と重要度
- 1993 年 3 月の日本図書館研究会研究大会で柴田正美が発表している

省令科目内容の現代性について (1993 年 11 月) No.53

- 1993 年 10 月調査
- 研究グループ構成員 52 名、回答 35 名分
 - － カリキュラム構造上の工夫
 - － 座学を少なくし、学生自身に考えさせる
 - － 演習科目との接続性を高める
 - － 一般教育科目として設定できるように内容を工夫する
 - － 資格要件と関係のない専門科目として開講する
 - － 大学院科目として「現代語学」との二者択一必修とさせる
 - － J-BISC、CD-MARC を演習の一部に取り込む
 - － データベース形成を演習課題に入れる
 - － 図書館員を含む職員制度の解説
 - － 教育改革の動向について

- 授業改善の方策について議論を深める必要がある
- 1994年2月の研究大会で柴田正美が結果を発表した

情報リテラシー教育の担当者 (1995年7月) No.60

- 『日本の図書館情報学教育 1995』所収の名簿に収録された情報リテラシー教育担当者の図書館関係団体への所属状況、図書館関係雑誌への投稿状況などを分析
 - 図書館と関係をもたないと考えられる人が多数、情報リテラシー教育を担当していることは問題があるだろうと結論づけている

授業としての図書館学関連科目開講状況 (1995年8月) No.61

- 1994年12月に調査した
- 近畿地区図書館学科協議会加盟の66大学を対象に
- 48大学(72.73%)が回答
 - 基礎教養科目として、図書館利用法・文献調査法・情報検索法などが重視されるようになっている
 - 必修ではなく、選択科目として開講される例が多い
 - 科目の担当は、図書館学担当教員とされる場合が多い
 - その結果、図書館学担当教員の授業負担が重くなっている

「新カリキュラムへの移行に関するアンケート調査」の結果概要 (1996年12月) No.72

- 1996年11月調査
- 研究例会参加の11名
 - 必修科目の増加が時間割編成に支障をきたしている
 - 学生の負担は確実に増加する
 - データベース形成に関する授業が無くなってしまふ
 - レファレンスや情報検索に関して演習と講義が分離されてしまふ
 - 資料組織化についての授業は中途半端なものになる
 - コンピュータ利用環境の確保が難しい

- － 担当者の確保に苦慮している
- － すでに来年度の時間割は確定しており、今更、変更が難しい
- － 通信教育課程では、長期間にわたる履修が難しくなる
- － スクーリングの期間が倍になり影響が大きい

司書教諭課程・新カリキュラムへの移行にかかわる状況と問題点 (仮題) に関するアンケート調査 (1998 年 11 月) No.82

- 1998 年 11 月に調査の方向性を検討し、12 月に調査した
- 近畿地区の当グループ関係者
 - － 新規に開講するところ
 - － 開講を取りやめるところ
 - － 担当者
 - － 文部省が「相当科目として認定するか」、大学側の対応
 - － 大学の自主性の程度
- 渡辺信一さんが、第 40 回研究大会 (1999 年 2 月) 「わが国における学校図書館司書教諭養成にかかわる諸問題—平成 11 年度からの新カリキュラムへの移行を中心に」と題して発表

「仮題: わが国における学校図書館司書教諭養成の諸問題 (Part II)」のアンケート調査について (1999 年 9 月) No.85

- 1999 年 7 月～9 月調査
 - － 1998 年 12 月の調査の補完で、1999 年 4 月以降の状況を把握する
- 関西地区および東海地区
- 渡辺信一さんと柴田正美が担当した
 - － 担当課程
 - － 任用形態
 - － 課程の開設態様
 - － 司書教諭としての経験年数

「司書教諭養成に関するアンケート」の集計結果 (1999 年 11 月) No.86 および No.87

- 1999 年 11 月の集計
 - － 182 枚配布、103 枚回収 (56.59%)
 - － 初めて開講した年度 1966 年から 1970 年にピークあり
 - － 担当者は 2 名程度で全 5 科目を開講
 - － 専門科目として自由選択
 - － 1 年間で必要な 5 科目を履修できる体制とする
 - － 放送大学での履修を、通常課程での履修とみなす大学が 2 つある
 - － 司書教諭資格のないままで授業を担当している 17 名 (うち 13 名は学校図書館にすら関係していない)
 - － 文部省と大学とのコミュニケーションが成り立っていないとの指摘あり

《研究大会発表準備》学校図書館司書教諭養成カリキュラムの現状と課題: アンケート調査を終えて (2000 年 3 月) No.88

- 文部省は「相当する」ことを「相談する」よう求めている
- 担当教官の適否、科目名 (規程どおりでない不可)、各科目の内容をチェックしている
- 各大学は、求めに応じて、教官の差し替え、科目名の変更、内容について補足説明などを実施
- 新カリキュラムは、充実した、幅広い視点が導入された、学校図書館の展開・充実に有効などの評価を受けている
- 司書科目と完全に切り離された点は「学校図書館の独自性」の強調になってしまう
- 教職科目で学校図書館の役割を理解させる必要があるだろう

学校図書館の役割と教育への貢献: 事例分析に基づいて (研究大会に向けての中間報告) (2000 年 11 月) No.92

- 2000 年 6 月に調査
- 柳勝文さん・戸田久美子さん・家城清美さん・村松常葉さんが担当する
- 予備調査における目標はつぎのように設定した

- 司書教諭と学校司書の仕事の役割分担を明らかにしたい
- 学校図書館の主要な職務を例示し、だれが担当しているかを問う
- 読書指導と学校司書の関わりを調べる必要があるだろう
- 12 学級以上の全日制高校 16 校を対象に
 - 教科教員・管理職の理解を進めることが重要
 - 資料をよく知り、利用者にそれらを示せること、学校教育とは異なった立場で児童生徒と接すること
 - 学校図書館は、教育組織の一部であるとともに、サービス組織でもあることを前提に活動する
 - メディア・資料・書誌の専門家として
 - 専任・専従が望ましい
 - 養成教育担当者は、現場の多様性について理解すること
 - 司書教諭は、教育上での経験が豊かであることを期待される
 - 調査対象が「高校のみ」で、学校図書館全体には敷衍できない
 - 高校よりは小学校を対象にしてほしかった
 - 公立と私立では、かなり違う
 - 一般教員を巻き込むための提言がほしい
 - 学校経営との関連にも目を向けてほしい

現職者研修と養成サイドの取り組み: 研究の趣旨・アンケート用紙について (2001 年 10 月) No.96、No.97、No.98、No.99

- 2001 年 8 月～9 月に調査を実施する
- 司書の養成を担当するサイドは、現職者の研修にも積極的に関わりをもつべきだという方向を実際はどうとらえているか
- 『日本の図書館情報学教育 2000』に収録された養成サイドの人たち、および本グループに参加する人 合わせて 177 名
- 締め切り時点での回収は 80 名、白紙回答も含めると 54% 以上の回収率
 - 現職者研修は、司書の養成教育に役立つとする人は、77.5%
 - (うち、現場経験のある人は 83.3%、ない人は 53.8%)
 - 現場の状況を知ることができる
 - 自分自身の変革を促せる

- 理論と実践の相互作用を実現できる
- 養成サイドに対する評価を受けることが可能である
- ボランティアとして図書館活動に参加するきっかけとなる
- 夏休みに他の図書館現場で働いてみる
- 大学院修了後の現場実習
- 講師等の要請に応じる意識は、40%の人がもっている
- 「現場をかつて知っていた」と「現場を知る」とは大きく異なる

司書教諭発令の現状-箕面市、豊中市、枚方市等について (2003年12月) No.107

- 箕面市・豊中市・枚方市等の231校
 - 回収は169校(69.3%)
 - 司書教諭の発令は、校務分掌とは別にされ、新年度に入ってから
 - そのため、学校図書館の新年度の運営に反映されにくい
 - 学校図書館に関する研修への派遣要員として司書教諭が発令されている事例が多い
 - 高等学校には学校司書が配置されている例が多く、司書教諭との棲み分けが適切に行われておらず、混乱が生じている
 - 司書教諭にレファレンスを担当させようとしているが、そのための養成内容も研修も実施されていない

司書・司書教諭養成科目に於ける授業改善・改革(FD)の研究 No.115、No.116

- 2005年10月
- 研究例会に出席していた大学教員を対象として調査・集計
- 新カリキュラムのもとでの学生の受講状況
- 受講学生の完遂度(ドロップアウトの理由など)
- 学生の理解度の状況認識
- 授業の改善・改革の実施状況
- 各科目の内容変更(強調すべきところ、触れる必要のなくなったところ、追加テーマ、内容)
 - 専任のみ15名、非常勤のみ13名、専任および非常勤24名計52名
 - 「大学としてのレベルアップ」を期待するのに非常勤のFDが求められて

いない

- 学生による「授業評価」に矮小化されてしまった FD
- 講義概要の公表は FD にあたるのか
- FD 評価を学年末に実施するので、受講学生に返すものがない
- 学生の脱落理由を調査することが重要であろう
- 学生による評価は、無責任な「評論者」を生み出している
- 大学運営全体の課題に繋がらない FD

近畿地区大学図書館における司書採用の現状 (2008 年 3 月) No.132

- 2006 年 4 月: 就職可能性調査
- 近畿地区図書館学科協議会に参加している大学・短大
 - 調査結果は、『図書館界』第 59 巻第 3 号 (2007 年 9 月) pp.188-199
 - 専任職員の採用は 1 割
 - 公募はしていない
 - ハローワークを利用している採用も多い
 - 採用者の 1/3 は、パート・アルバイトである
 - 面接と書類選考で採用を決定している
 - 人材派遣会社を積極的に利用している
 - 司書を採用しない理由は、人事異動の硬直化に繋がるから
 - 司書に期待されているのは実習・実務経験・演習である

司書課程における図書館実習の状況

- 2007 年 4 月調査
- 司書課程を設置している大学・短大を対象に
- 144 校中、43 校が実施
 - 実習受け入れ先の図書館が少ない
 - 図書館見学を「図書館実習」とみなしている大学がある
 - 大学図書館を実習先としている場合あり

近畿地区の司書課程における「特論」の開講状況

- 2016年4月調査
- 近畿地区で司書課程を設置している大学・短大
- 近畿地区 国立3、公立1、私立43
- Web シラバスによる (ログインを求められたり、非常に重いものは除外した)
- 司書課程のページがなかったり
- 科目名などが分からないと探せない構造の HP も多い
 - － 特論は他の課程にも開かれていることが多く、図書館関係の知識のない学生も含まれるので大変である
 - － 特論 = 実習という場合もあった
 - － 定めでは、特論は1単位であるが、2単位として開講している
 - － 他大学との交換はできないようだ
 - － 司書講習との関わりもつくられていない

大学司書課程における 2016 年度「図書館実習」開講状況 (2016 年 4 月) No.187

- 2016 年度 4 月の調査
- 全国で司書課程を設置している大学・短大
- 2007 年度 43 校、2011 年度 48 校、2016 年度 76 校
 - － 誰でも行かせるのではなく、事前チェックをする必要がある
 - － 「必修」にするには、実習先の確保が課題である
 - － 地域に公開されているならば大学図書館も実習先とできる
 - － 専門図書館も公開されていれば範囲になるだろう
 - － きれいな仕事ではないことを理解させる
 - － 受け入れ先の図書館が内容を考え、大学がチェックをしてゆくこと
 - － 実習以外にも、職場見学、イベント参加、ボランティアでも図書館の状況は理解できるだろう
 - － 図書館側の職員が不慣れであったり、大学としても気をつかう

6 30年の研究会活動を振り返ると

人の交流という面では、非常に大きな効果があったといえることができる。

研究者・教育担当者、図書館等の現場で働いている人たち同士の接触とコミュニケーションの実現は、意義のあることであった。

司書、司書教諭、学校司書の養成カリキュラムについて自由な論議が深められてきて、その具体化が実現される状況を生み出してきている。それは、各科目の内容を深く検討し、さらに現場に有効な事柄を組み込む機会を作っている。多くの授業実践の交流があり、それらを聴いた教育担当者が、さらなる工夫を重ねるきっかけを提供してきた。

これらを踏まえて、図書館のあり方について新たな思考を試み、それらと、教育活動の連続性を生み出して、まったく新しい展開を作り出していることは明らかだろう。

また、担当する教員(我々自身の)の資質向上のための意識改革に有効なものを生み出しており、さらなる高みを目指してきたといえる。

その過程で、現行カリキュラムの改善・改革提案(独自案の作成、文部科学省等から提示されたものへの批判、追加すべき内容等の提案)を実施している点も見逃さない効果・成果となってきている。

具体的には、2008年2月の研究大会において、柴田正美が、「司書養成制度の諸問題と今後の展望」と題する発表をおこない、新たなカリキュラムを提案している。

その主要な項目をあげるとつぎのようなものとなる。

- 「大学における科目」と「司書講習科目」の並立(「読み替え」や「適応」という形でなく)を提起
- デジタル化に対応できる司書の養成
- 検定司書・認定司書・相当司書の提案
- 25単位以上

これらの結果、研究例会の席では、「研究課題」というまとまりをもったものではないが、2017年頃より、新たなカリキュラムの提案を始める様子も見えている。

7 新たなステージに向けて

研究会活動は、多くの人たちの知恵と力を結集する形で進んできた。そして、メンバーの広がり、若手の参加が増えているなど、新たな方向への展開も予測できる状況に至っている。

これまでの研究会活動の内容に加えて、現職者研修や、図書館の現場から何を学び、それらを司書養成教育や、図書館研究に、どう繋げてゆくかが問われるところとなってきている。

2018年5月に開いた研究例会において、代表者の交代(柴田正美→川原亜希世さん)も了承され、これまでの経験と蓄積を足場にして、より高位の研究会活動への見通しを立てることができるようになった。今後とも、このグループの活動に注目いただけるようお願いして、筆を擱くこととする。

なお、ご意見・ご質問等がありましたら、つぎのアドレスまでお寄せください。

shibata.masami@mie-u.ac.jp

『図書館学教育研究グループ通信』 No.1～No.200 総目次

参考データ: 1972.12 理事会 1978 研究大会にて発表 (第1期)
1987.2.7 再開 (第二次の活動)

No.1 (1987.02.15) 第1回会合 (1987.02.07) 報告

研究グループ発足にいたる経過	塩見 昇
研究グループの課題について	塩見 昇
図書館学科設置の可能性について	森 耕一
JLA 図書館学教育部会との関連で報告及び説明	渡辺信一
参加者の意見と各大学・短大での実状	
今後の検討の方向についての討議	
今後の研究グループの活動	

No.2 (1987.05.15) 第2回会合 (1987.03.30) 報告

初参加者の意見	
1987年12月の社会教育局長あて報告書について	塩見 昇
文部省担当係官の個人的見解の紹介	塩見 昇
4年制における図書館学教育	柴田正美
柴田私案の検討	
近畿地区司書有資格公立図書館長に対するアンケートの報告	渡辺信一
次回の研究会について	
JLA 教育部会幹事会において説明	

No.3 (1987.07.10) 第3回会合 (1987.05.16) 報告

司書課程科目改正案	埜上 衛
私案	志保田 務
図書館学科目の構成 (柴田私案第2案)	柴田正美
3つの報告の検討	
今後の検討の方向について	
当面のスケジュールについて	
次回について	

No.4 (1987.09.18) 第4回会合 (1987.07.11) 報告

- 司書講習科目改訂案について 柴田正美
 司書講習科目改訂案の検討
 今後の予定について
- No.5 (1987.09.18) 第 18 回図書館学教育研究集会 (1987.08.05~07) 報告
 今まど子 (中央大学) 教育部会長のあいさつ 今 まど子
 発題講演: 図書館学教育と司書課程 岩猿敏生
 図書館学教育をめぐる環境の変化とその影響 高山正也
 図書館学科目の構成 - 司書講習科目の改訂 柴田正美
 司書養成コースにおけるカリキュラムをめぐって
 田辺 広・久保輝巳・鈴木英二
- 討議・総括討議
 今後について
 (別添付録) 司書講習科目改訂案
- No.6 (1987.11.20) 第 5 回会合 (1987.09.19) 報告
 JLA 研究集会について 柴田正美
 JLA 研究集会で出された主な意見について 渡辺信一
 討論
 SLA 図書館学担当大学教員全国研究集会について
 JLA 教育部会幹事会報告 渡辺信一
 JLA 全国図書館大会への取り組みについての討議
 今後の活動方針
 次回の予定について
- No.7 (1987.12.15) 第 6 回会合 (1987.11.21) 報告
 JLA 全国大会第 1 分科会の模様 渡辺信一
 司書養成科目 (省令) 改定の促進についての見解 尾原淳夫
 JLA 常務理事会の考え方 森 耕一
 図書館学関係科目の位置づけ等に関する調査結果 塩見 昇
 オーストラリアと日本の大学図書館 森 耕一
 日本図書館研究会研究大会の発表について
 今後の研究活動について
- No.8 (1988.01.30) 第 39 回近畿地区図書館学科協議会 (1987.12.15) 報告
 JLA 図書館学教育部会報告 渡辺信一

- | | |
|--|-----------|
| 学校図書館の最近の動向と課題 | 尾原淳夫 |
| 省令科目の改訂 | 柴田正美 |
| 図書館学科構想をめぐるアンケートの集約について | 塩見 昇 |
| 協議の内容 | |
| No.9 (1988.03.15) 第 7 回会合 (1988.01.30) 報告 | |
| JLA の文部省に対する要望書について | 渡辺信一 |
| 日本図書館研究会研究大会における発表について | 柴田正美 |
| 学科としての設置基準について | 石塚栄二 |
| 次回研究会について | |
| No.10 (1988.05.21) 第 8 回会合 (1988.03.15) 報告 | |
| 日本図書館研究会第 29 回研究大会での発表について | 柴田正美 |
| 日本図書館研究会第 29 回研究大会報告についての討議 | |
| JLA 教育部会幹事会報告 | 渡辺信一 |
| 幹事会の動きについての討議 | |
| 各大学・短期大学における教育上の配慮・工夫・努力 | |
| 教育上の配慮・工夫・努力についての討議 | |
| 次回について | |
| No.11 (1988.06.01) 第 9 回会合 (1988.05.21) 報告 | |
| JLA 教育部会幹事会を中心とした最近の動きについて | 渡辺信一・柴田正美 |
| JLA 教育部会の動きについての意見 | |
| 図書館学科についての研究をどう進めるか | |
| グループの運営について | |
| 次回について | |
| No.12 (1988.08.20) 第 10 回会合 (1988.07.16) 報告 | |
| 図書館学科の現状 | 石塚栄二 |
| 質疑と検討 | |
| JLA 教育部会の動き: 報告と討論 | 渡辺信一・柴田正美 |
| 次回について | |
| No.13 (1988.09.17) 第 19 回図書館学教育研究集会 (1988.08.04~05) 報告 | |
| 愛知淑徳大学図書館情報学科について | 津田良成 |
| 省令改訂に向けての動き | 今 まど子 |
| 図書館学カリキュラム構築・改定に影響する諸要因 | 細野公男 |

- 省令科目改訂に向けて
現代の課題に応えるには何を教えるべきか
司書養成科目<省令>改定について (経過報告)
討論
渋谷嘉彦
柴田正美
- No.14 (1988.10.25) 第 11 回会合 (1988.09.17) 報告
東洋大学の状況
愛知淑徳大学の状況
討論
石塚栄二
柴田正美
- JLA 図書館学教育研究集会の報告
討論と印象
今後の予定ととりあげるべきテーマ
柴田正美
- No.15 (1989.01.14) 第 12 回会合 (1988.11.19) 報告
全国図書館大会第 11 分科会について
討論
渡辺信一
- 日本図書館研究会・研究大会の発表テーマについて
次回の研究会について
- No.16 (1989.01.14) 第 40 回近畿地区図書館学科協議会 (1988.11.25) 報告
第 39 回近畿地区図書館学科協議会報告
大橋一二
JLA 図書館学教育部会の動き
渡辺信一・柴田正美・塩見 昇
学校図書館の最近の動向と課題
尾原淳夫
ゼミ形式を導入した図書館学教育
森 耕一
就職状況調査の依頼
田口瑛子
NCR1987 年版の扱い方
埜上 衛
来年度当番校について
- No.17 (1989.02.15) 第 13 回会合 (1989.01.14) 報告
図書館学教育の抱えている問題点
次回研究会について
- No.18 (1989.05.15) 第 14 回会合 (1989.04.04) 報告
[日本図書館研究会・第 30 回] 研究大会での発表
研究発表に対する意見
今後の研究グループの活動について
次回について

- No.19 (1989.06.30) 第 15 回会合 (1989.05.27) 報告
- JLA 図書館 [学] 教育部会の動き 渡辺信一
 - 日本図書館学会の動き 渡辺信一
 - 立教大学文学部の実施したアンケートについて 渡辺信一
 - SLA の研究集会 山田泰嗣
 - 図書館実習について
 - 今後のグループの方針
 - 当面の活動について
 - グループの世話役について
 - 学生交流の場の提案 塩見 昇
 - 次回について
- No.20 (1989.09.10) 第 16 回会合 (1989.07.22) 報告
- JLA 図書館学教育部会の動き 渡辺信一
 - 学校図書館の充実に関する要望書について 塩見 昇
 - 図書館実習について 渡辺信一
 - 授業実践について 村田修身
 - 今後の研究会について
- No.21 (1989.11.01) 第 17 回会合 (1989.10.07) 報告
- JLA が文部省に対して要望書を出したこと
 - 図書館学教育研究会のアンケート
 - 日本図書館研究会研究大会での発表について
 - 図書館学担当教員全国研究集会報告 池田信夫
 - 情報処理課程と司書課程 山田泰嗣
 - 次回について
- No.22 (1989.12.31) 第 18 回会合 (1989.11.18) 報告
- JLA 全国図書館大会の概要 渡辺信一
 - 私の授業実践 図書館情報学概論 塩見 昇
 - 質疑と討論
 - 次回および研究大会に向けて
 - 次回について
- No.23 (1990.01.15) 第 41 回近畿地区図書館学科協議会 (1989.12.14) 報告
- 第 40 回協議会報告 森川 彰

学校図書館の動向と課題	尾原淳夫
省令科目の改正についての最近の動き	塩見 昇
全国図書館大会の報告	渡辺信一
図書館学教育部会 30 周年記念事業および祝賀会	渡辺信一
省令科目: 情報管理に相当する科目について	柴田正美
No.24 (1990.02.15) 第 19 回会合 (1990.01.27) 報告	
シンポジウム「生涯学習時代に向けての図書館学教育」報告	大城善盛
省令科目『情報管理』の現状	柴田正美
省令科目改訂に関する最近の動き	塩見 昇
図書館学を学ぶ学生の集い	塩見 昇
次回について	
No.25 (1990.04.25) 第 20 回会合 (1990.03.24) 報告	
JLA 図書館学教育部会幹事会の動き	渡辺信一
社教審 WG に関して	塩見 昇
図書館学で障害者サービスはどう位置づけられているか	深井耀子
問題提起: 図書館学教育と障害者サービス	天満隆之輔
次回について	
No.26 (1990.05.25) 緊急研究会 (1990.04.28) 報告	
経過報告と資料の説明	渡辺信一
質疑と討論	
グループとしての行動について	
次回について	
No.27 (1990.06.25) 第 21 回会合 (1990.05.26) 報告	
ビデオ「私も本が読みたい」	
視覚障害者の立場から見た司書養成教育	服部敦司
司書養成カリキュラム改訂のその後の動き	渡辺信一
次回について	
No.28 (1990.07.25) 第 22 回会合 (1990.07.07) 報告	
5 月 30 日の JLA 対文部省交渉について	塩見 昇
JLA 図書館学教育部会総会にて	塩見 昇
JLA 図書館学教育部会の動き	渡辺信一
文部省 (仮案) に対する意見など	

その他

次回について

No.29 (1990.10.15) 第 23 回会合 (1990.09.29) 報告

日本図書館学会研究大会報告

大城善盛ほか

日本図書館研究会の図書館学セミナー報告

佐藤毅彦

全国図書館大会分科会 (図書館員養成) について

渡辺信一

今後の研究会の進め方について

次回について

No.30 (1991.01.01) 第 24 回会合 (1990.12.01) 報告

JLA 全国図書館大会第 11 分科会 (図書館員養成) について

渡辺信一

社教審 WG のその後

塩見 昇

日本学術会議の登録・学術研究団体

渡辺信一

日本育英会奨学金返還義務の免除に関して

渡辺信一

情報処理教育についての ACM 報告書

田窪直規

「情報管理」の授業について親和女子大学の場合

山田泰嗣

同志社大学の場合

大城善盛

次回について

No.31 (1991.01.20) 第 42 回近畿地区図書館学科協議会 (1990.12.13) 報告

第 41 回協議会報告

森川 彰

IFLA スtockホルム大会について

埜上 衛

文部省の省令科目改訂の動向

塩見 昇

省令科目の改訂と 1990 年代の司書養成問題

渡辺信一

関連して出された意見など

次回の当番校について

No.32 (1991.02.28) 第 25 回研究会 (1991.01.26) 報告

社教審 WG その後

塩見 昇

日本育英会奨学金返還義務免除の件

塩見 昇

当研究グループの発表内容についての検討

次回について

No.33 (1991.04.25) 第 26 回研究会 (1991.03.30) 報告

内モンゴルの図書館事情について (内蒙古包頭師範学院専科図書館) 劉 曉晴
研究大会での発表の総括

- | | |
|--|----------------------|
| 図書館情報大学のアンケート結果について | 田窪直規 |
| 国際ドキュメンテーション総会の出席者について | 田窪直規 |
| “TP&D フォーラム 91” について | 田窪直規 |
| 採用試験にみる「期待される図書館員像」
次回について— | |
| No.34 (1991.06.10) 第 27 回研究会 (1991.05.25) 報告
ビデオ『あなたの要求を図書館へ』
飛び級大学院生と司書の資格
公共図書館等の採用試験問題について
次回について | |
| No.35 (1991.08.01) 第 28 回研究会 (1991.07.06) 報告
ALA 認可校の閉校問題について
補足説明と質疑・討論
カリキュラム改定の動きに関して
次回研究会について | 鈴木幸久

渡辺信一 |
| No.36 (1991.10.01) 第 29 回研究会 (緊急) (1991.08.01) 報告
今回の案と 1990 年 5 月に提示された案の違い
現行省令科目との対照
内容についての検討
次回について | 渡辺信一
柴田正美 |
| No.37 (1991.11.01) 第 30 回研究会 (1991.09.28) 報告
JLA 教育部会研究集会とその他の論議の機会について
報告と意見
次回について | 渡辺信一 |
| No.38 (1991.11.01) JLA 図書館学教育部会緊急研究集会 (1991.10.06) 報告
今部会長あいさつ
藤川正信氏の説明
フロアとの質疑応答と補足説明 | 今 まど子
藤川正信 |
| No.39 (1991.11.01) 第 77 回全国図書館大会第 11 分科会 (図書館学教育) (1991.10.23)
報告
アメリカの図書館および図書館学教育の最近の動向
四国における司書養成の現状と課題 | セオダー・ウェルチ
石堂広光 |

- 司書・司書補講習科目見直し案について
 図書館学担当教員の定数について
- No.40 (1992.01.01) 第 31 回研究会 (1991.11.30) 報告
 10 月の 2 つの集会について – 報告を中心に討議 –
 博物館学芸員課程について 田窪直規
 研究大会に向けて
 次回について
- No.41 (1992.03.01) 第 32 回研究会 (1992.01.25) 報告
 文部省と JLA との懇談会 塩見 昇
 JLA 図書館学教育部会拡大幹事会 渡辺信一・柴田正美
 大学図書館研究会での論議 岩猿敏生・渡辺信一
 日本図書館研究会研究大会での発表について 柴田正美
 次回について
- No.42 (1992.04.10) 第 33 回研究会 (1992.03.23) 報告
 近畿地区図書館学科協議会 渡辺信一
 日本図書館研究会第 33 回研究大会 渡辺信一
 JLA 図書館学教育部会幹事会 渡辺信一・岩猿敏生・柴田正美
 図書館専門委員会 1991 年 6 月案批判
 討論
 公立図書館の採用試験問題について
 次回について
- No.43 (1992.07.25) 第 34 回研究会 (1992.06.06) 報告
 JLA 百周年関連行事について 塩見 昇
 JLA 図書館学教育部会総会について 渡辺信一
 JLA 全国図書館大会第 11 分科会について 渡辺信一
 公立図書館の試験問題に関して 桒上 衛・柴田正美
 専門委員会案批判 柴田正美
 カリキュラム改訂に関する動きの予測
 生涯学習振興策に関わる中間報告について 塩見 昇
 次回について
- No.44 (1992.09.01) 第 35 回研究会 (1992.07.25) 報告
 カリキュラム改訂に関する動き 渡辺信一

- 各種の報告
公共図書館の採用試験に関して
専門委員会案批判
次回について
渡辺信一
- No.45 (1992.11.25) 第 36 回研究会 (1992.10.03) 報告
採用試験に関するアンケート様式について
生涯学習審議会答申その他の図書館員養成をめぐる話題
全国図書館大会・愛知大会について
近畿地区図書館学科協議会について
日米ワンデイ・セミナーについて
次回について
渡辺信一
深井耀子
渡辺信一
- No.46 (1992.12.01) 第 37 回研究会 (1992.11.28) 報告
採用試験に関するアンケートの初期集計についての報告
報告に対する意見と検討等
JLA 全国図書館大会についての報告
次回について
渡辺信一
- No.47 (1993.03.27) 第 38 回研究会 (1993.01.30) 報告
近畿地区公立図書館における採用試験について
シンポジウム「いま、問われる『司書』」における「図書館学教育の立場からに
ついて」
2つの報告に対する意見の表明
1993 年度の研究会の進め方
その他
次回について
柴田正美
渡辺信一
- No.48 (1993.06.01) 第 39 回研究会 (1993.03.27) 報告
日本図書館研究会研究大会の様子
JLA 図書館学教育部会の動き
全国 SLA 図書館学教育担当教員全国研究集会
今後の研究会の進め方
次回について
渡辺信一
- No.49 (1993.07.27) 第 40 回研究会 (1993.06.05) 報告
日本図書館学会春季研究集会の概要
佐藤毅彦

日本図書館研究会の動き	柴田正美
JLA 図書館学教育部会の動き	渡辺信一
省令科目改訂案の統一に向けて 意見交換と討議	柴田正美
サーチャージ試験に関して	戸田光昭
グループの会計報告について 次回について	大城善盛
No.50 (1993.07.27) 文部省学習情報課との懇談会 (1993.07.19) の報告	
日時・場所と出席者	
懇談会の概要	
渡辺部会長の説明要旨	
遠藤課長の現況に関わる説明等	
遠藤課長の提起した 4 つの問いかけ	
4 つの問いかけに答えながらの懇談の様子	
その他の話題	
No.51 (1993.09.25) 第 41 回研究会 (1993.07.27) 報告	
JLA 教育部会研究集会に関して	渡辺信一
文部省学習情報課と JLA の話し合い	
新しい時代に対応するカリキュラムの内容	柴田正美
カリキュラム内容についての意見	
今後のカリキュラム検討の方向	
[情報検索基礎能力試験] について	戸田光昭
次回について	
No.52 (1993.10.08) 第 42 回研究会 (1993.09.25) 報告	
JLA 教育部会研究集会の報告	倉橋英逸
全国学校図書館協議会主催の図書館学担当大学教員全国研究集会の報告	柴田正美
韓国の図書館学研究者および学生との交流会	田窪直規
“飛び級院生” 資格問題	
司書養成課程の今後の在り方について	
今後の当グループの研究課題について	
『グループ通信』第 50 号刊行を記念して	

次回について

- No.53 (1994.01.01) 第 43 回研究会 (1993.11.27) 報告
学術用語集 – 図書館情報学編 – について 岩猿敏生
JLA 全国図書館大会第 11 分科会の報告について 渡辺信一
JLA 図書館学教育部会の動き 渡辺信一
省令科目内容の現代性について 柴田正美
柴田報告に関する研究討議

次回について

- No.54 (1994.03.01) 第 44 回研究会 (1994.01.22) 報告
最終案の提起と今後の進み方について 渡辺信一
最終案についての若干の説明 渡辺信一・柴田正美
最終案に関する意見
1994 年度の研究計画について
次回について

- No.55 (1994.05.15) 第 45 回研究会 (1994.03.26) 報告
科目等履修生の制度について 石塚栄二
日図研第 35 回研究大会でのグループ研究発表に関して
カリキュラム改訂その後 渡辺信一
1994 年度の研究計画に関して
次回について

- No.56 (1994.07.10) 第 46 回研究会 (1994.06.04) 報告
学校図書館と専門職の養成 佐野友彦
討議
次回について

- No.57 (1994.10.15) 第 47 回研究例会 (1994.07.16) 報告
JLA 図書館学教育部会の動き 渡辺信一
大学図書館職員の現状と養成 鍵本芳雄
討議
次回について

- No.58 (1994.12.15) 第 48 回研究例会 (1994.10.15) 報告
九州大谷短期大学の情報司書コースについて 二村 健
討議

次回について

No.59 (1995.05.20) 第 49 回研究例会 (1994.12.17) 報告

専門図書館職員の現状と養成上の課題

中井正子

質疑と討論

図書館をめぐる動き

日本図書館研究会の研究大会に関して

次回について

No.60 (1995.05.20) 第 50 回研究例会 (1995.02.18) 報告

阪神大震災の被災状況

図書館関係スケジュール

専任不在に関する論議

情報リテラシー教育の担当者

1995 年度の研究活動計画

その他

No.61 (1995.08.01) 第 51 回研究例会 (1995.05.20) 報告

各種の報告と案内

「図書館情報学概論」講義のための一つの視点

村田修身

村田氏の発表についての意見等

授業としての図書館学関連科目開講状況

柴田正美

今後の研究例会のもち方・テーマに関して

次回について

No.62 (1995.10.01) 第 52 回研究例会 (1995.08.04) 報告

各種の案内等

科研『情報処理技術の展開に基づいた図書館情報学教育の高度化についての研究』報告

倉橋英逸

研究成果の報告に対する意見等

韓国図書館情報学会との交流について

図書館学教育をめぐる若干の動きについて

次回について

No.63 (1995.12.16) 第 53 回研究例会 (1995.10.07) 報告

各種の案内等

シラバス案 – 「図書館資料論」

村田修身

- シラバス案 – 「非図書資料の管理」
次回について 山本貴子
- No.64 (1996.02.10) 第 54 回研究例会 (1995.12.16) 報告
サイドストーリーとしての AV 佐藤毅彦
図書各部の名称について 岩猿敏生
各種の連絡など
次回について
- No.65 (1996.04.01) 第 55 回研究例会 (1996.02.10) 報告
計画部会 “改善案” をめぐって 経過報告 渡辺信一
計画部会 “改善案” をめぐって 計画部会案批判 柴田正美
計画部会 “改善案” をめぐって 質疑と意見交換
日本図書館研究会研究大会に向けて
国立国会図書館関西館での研究開発に関して 原田圭子
グループの財政状況について
次回について
- No.66 (1996.04.01) JLA 図書館学教育部会緊急研究集会 (1996.02.24) 報告
開会のあいさつ/趣旨説明/経過報告 渡辺信一
計画部会改善案の解説等 田中久文・細野公男・村田文生
計画部会改善案に対する LA の見解 酒川玲子
計画部会改善案についての見解 柴田正美
質疑応答および意見の表明
最後に 渡辺信一
- No.67 (1996.06.01) 第 56 回研究例会 (1996.04.27) 報告
授業実践報告: 資料組織法 田窪直規
「司書教諭養成は大学で行うべき」について 佐野友彦
グループの財政状況について 柴田正美
図書館学教育雑感 岩猿敏生
岩猿先生を祝う会
- No.68 (1996.06.27) 第 57 回研究例会 (1996.06.22) 報告
ILA 図書館学教育部会の動き
今後の研究課題について – 生涯学習審議会社会教育分科審議会報告に関わっ
て –

幹事の交替について

- No.69 (1996.08.15) 第 58 回研究例会 (1996.07.27) 報告
各種の報告
審議会報告を受けて - 4 年制大学の立場から 石塚栄二
審議会報告を受けて - 短期大学の立場から 村田修身
JLA 役員と文部省の懇談会で明らかになったこと 渡辺信一
B グループ報告: 審議会報告と JLA カリキュラム案の比較 柴田正美
グループ毎の今後の検討方向
今後の研究例会について
- No.70 (1996.12.27) 第 59 回研究例会 (1996.09.07) 報告
予定されている各種の会合について
図書館法施行規則に関して
各グループの研究状況と討議
次回について
- No.71 (1996.12.27) 第 60 回研究例会 (1996.10.12) 報告
関係する会合の予告
「図書館利用教育ガイドライン (第 2 次案)」について 丸本郁子
各グループの研究状況と討議
9 月 20 日説明会 [文部省主催: 司書課程認定申請について] の印象と各大学の
対応状況
次回について
- No.72 (1996.12.27) 第 61 回研究例会 (1996.11.09) 報告
研究発表に向けて 柴田正美
各科目の内容の検討
[新カリキュラムへの移行に関する] アンケート調査の結果概要 渡辺信一
次回について
- No.73 (1997.05.31) 第 62 回研究例会 (1997.02.01) 報告
日本図書館研究会創立 50 周年記念研究大会・式典に関して
全国図書館大会 (大分で開催)
近畿地区図書館学科協議会 (英知大学で開催)
今後の予定
JLA 図書館学教育部会の役員選挙について

「この国の図書館をどうするつもりか」セミナーの案内
他の大学における司書資格関連単位の取り扱い
1997年度の活動計画について
次回について

- No.74 (1997.08.23) 第63回研究例会 (1997.05.31) 報告
松下電器技術情報部における情報活動 南山和男
各種の報告
他大学の単位認定 石塚栄二
新カリキュラムへの移行に関して 村田修身
今後の研究活動計画について
次回について
- No.75 (1997.10.25) 第64回研究例会 (1997.08.23) 報告
各種の報告と案内
『図書館用語集』改訂版の正誤表に関して
[図書館経営論]の授業実践報告 井上裕雄
[専門資料論・同演習]の授業実践報告 南山和男
ビデオテープの上映:『本があって、人がいて』
「学校図書館を考える会・近畿」6年間のとりくみ 北村幸子
次回について
- No.76 (1997.12.20) 第65回研究例会 (1997.10.25) 報告
各種の報告と案内
事例発表 [図書館経営論] 加藤三郎
全国図書館大会第12分科会での発表要旨 渡辺信一・柴田正美
研究大会のグループ発表について
次回について
- No.77 (1998.01.31) 第66回研究例会 (1997.12.20) 報告
各種の報告と案内
近畿地区の図書館開講大学
司書教諭講習の充実策 塩見昇
充実策に関する質疑など
わが国の図書館界:回顧と展望 渡辺信一
研究大会発表に向けて

次回およびそれ以後の研究例会について

- No.78 (1998.03.28) 第 67 回研究例会 (1998.01.31) 報告
各種の報告
グループ研究発表に関して
研究発表:「図書の整理」を中心に – 学校図書館司書教諭講習から 山田泰嗣
次回について
- No.79 (1998.05.30) 第 68 回研究例会 (1998.03.28) 報告
各種の報告
「児童サービス論」の授業 岩崎れい
「児童サービス論」の授業 戸田光昭
3月18日の省令に関して
次回について
- No.80 (1998.09.26) 第 69 回研究例会 (1998.05.30) 報告
各種の報告、予定など
司書教諭養成の問題点と課題 澤 利政
学図法「改正」後の学校図書館職員の現状と課題 二宮博行
発表にかかわっての意見の表明
新科目「情報メディアの活用」について 柴田正美
柴田報告に対する意見など
次回について
- No.81 (1998.11.28) 第 70 回研究例会 (1998.09.26) 報告
各種の報告、予定など
University of Wisconsin – Madison, School of Library and Information
Studies における図書館情報学教育 コーンハウザ・由香子
21世紀の情報専門職をめざして: カナダとアメリカ合衆国における図書館情報
学教育と情報環境 倉橋英逸
その他 (承合/確認事項等)
次回について
- No.82 (1999.01.30) 第 71 回研究例会 (1998.11.28) 報告
各種の報告、予定など
[授業実践報告]「図書の整理」 – 初めての司書教諭講習の経験から 柳 勝文
授業実践報告に関連して出された意見等

研究大会のグループ研究発表について

アンケート調査「新科目の開講準備状況」に関わって出された意見の記録

次回について

No.83 (1999.03.27) 第72回研究例会 (1999.01.30) 報告

各種の報告、予定など

「司書教諭講習」への要望 – 小学校の立場から –

木村 稔

発表に関連して出された意見等

研究大会での発表に向けて

発表に関わる意見等

次回について

No.84 (1999.07.03) 第73回研究例会 (1999.03.27) 報告

「図書館概論」について (授業実践報告)

校條善夫

各種の報告

意見等

次回について

No.85 (1999.09.25) 第74回研究例会 (1999.07.03) 報告

参考文献を活用しての発表授業 – 図書館経営の観点から

鈴木嘉弘

鈴木氏の発表に関してのコメント等

文献情報利用教育の概要と実践事例の紹介

戸田光昭

戸田氏の発表に関するコメント等

「仮題: わが国における学校図書館司書教諭養成の諸問題 (Part I)」のアンケート調査について

各種の報告等

次回・次々回について

No.86 (1999.11.27) 第75回研究例会 (1999.09.25) 報告

『基本件名標目表 第4版』の特徴と改訂した諸点

石塚栄二

授業実践報告「学校経営と学校図書館」

村田修身

放送大学における「学校経営と学校図書館」

渡辺信一

学校現場での新設科目「総合学習」について: 話題提供

柳 勝文

「司書教諭養成に関するアンケート」の中間報告について

柴田正美、コーンハウザ・由香子

各種の報告と案内

次回・次々回について

No.87 (2000.01.29) 第 76 回研究例会 (1999.11.27) 報告

司書教諭講習における授業実践:「学校経営と学校図書館」 鈴木嘉弘
情報教育と学校図書館:『情報処理』誌掲載論文との関連で 田窪直規
「司書教諭養成に関するアンケート」の集計結果 柴田正美
文部省配布資料についての佐藤毅彦氏(甲南女子大学)からの疑問
各種の報告と案内
次回について

No.88 (2000.03.25) 第 77 回研究例会 (2000.01.29) 報告

EU の情報政策 – 加盟国の発展段階 – 荒岡興太郎
《研究大会発表準備》学校図書館司書教諭養成カリキュラムの現状と課題: アン
ケート調査を終えて 柴田正美
柴田報告に対する意見等
各種の報告と案内
次回以降について

No.89 (2000.07.29) 第 78 回研究例会 (2000.03.25) 報告

いかに学校図書館が〈心の居場所〉になりうるか – モデルを通しての一考察
枝元益祐
枝元発表に対する意見など
官庁資料に関する一考察: [京都府立] 総合資料館官庁資料コーナーの事例をも
とに 中川正己
中川発表に対する意見等
2000 年度の活動計画
各種の報告と案内
次回研究例会について

No.90 (2000.09.16) 第 79 回研究例会 (2000.07.29) 報告

目録考: 目録と書目と書誌 岩猿敏生
学校図書館の役割と教育への貢献: 事例分析に基づいて
柳 勝文・戸田久美子・家城清美・村松常葉
Web 授業の創造 倉橋英逸
各種の案内/報告類
今後の研究会活動について

次回研究例会について

No.91 (2000.11.25) 第 80 回研究例会 (2000.09.16) 報告

甲南女子大学図書館における利用教育 山田郁文
沖縄における Education for Librarianship の沿革と現状 漢那憲治
ビデオを使った図書館学授業の実践報告 川原亜希世
各種の案内/報告類
今後の研究活動に関して
次回研究例会について

No.92 (2001.02.03) 第 81 回研究例会 (2000.11.25) 報告

教材の比較研究「学校図書館メディアの構成」 山田泰嗣
山田氏の研究発表に対する質疑と意見
学校図書館の役割と教育への貢献: 事例分析に基づいて (研究大会に向けての
中間報告) 戸田久美子・家城清美・村松常葉・中島幸子・柳 勝文
中間報告に対する質疑と意見など
各種の案内/報告類
次回研究例会について

No.93 (2001.03.31) 第 82 回研究例会 (2001.02.03) 報告

児童・YA サービス担当者養成教育の現状 井上靖代
井上氏の発表に対する質疑と意見
学校図書館の役割と教育への貢献: 事例分析に基づいて
柳 勝文・戸田久美子・家城清美・村松常葉
柳氏等の発表に対する質疑と意見
図書館情報学分野の分類法その 20 世紀を振り返り、21 世紀を展望する
田窪直規
[司書課程]「再認定」の範囲 坂井 暉
各種の案内/報告類
次回研究例会について

No.94 (2001.05.26) 第 83 回研究例会 (2001.03.31) 報告

学習の中の情報リテラシー基準 – 学校図書館を中心としたしくみづくりへの
提案 岩崎れい、コーンハウザ・由香子
発表に対する質疑と意見
研究大会での発表に関して

- 各種の案内/報告類
 次回研究例会について
- No.95 (2001.07.28) 第 84 回研究例会 (2001.05.26) 報告
- 公共図書館概念の展開 岩猿敏生
 発表に対する意見など
- BSH の最新動向 柴田正美
 発表に対する意見など
- 各種の案内/報告類
 今年度の研究テーマについて
 研究グループ財政について
 幹事の交代について
 次回研究例会について
- No.96 (2001.10.06) 第 85 回研究例会 (2001.07.28) 報告
- 「学習指導と学校図書館」 – 平成 12 年度の授業における一つの試み 木村 稔
 発表に対する意見など
- 現職者研修と養成サイドの取り組み 柴田正美
 研究の趣旨・アンケート用紙についての意見など
- 今後の研究の進め方
 各種の案内/報告類
 次回研究例会について
- No.97 (2001.12.22) 第 86 回研究例会 (2001.10.06) 報告
- 現職者研修と養成サイドの取り組み (アンケート調査の中間報告) 柴田正美
 中間報告に対する意見等
- 各種の案内/報告類
 次回研究例会について
- No.98 (2002.02.09) 第 87 回研究例会 (2001.12.22) 報告
- 高等学校「情報」科新設と司書課程科目 吉川有智子
 発表に対する質疑等
- 現職者研修と養成サイドの取り組み (アンケートの最終結果) 柴田正美
 各種の案内/報告類
 次回研究例会について
- No.99 (2002.05.11) 第 88 回研究例会 (2002.02.09) 報告

- パソコンを利用した映像教材の作成 – 情報検索演習での試みと可能性の検討
[Part I] 笠井詠子
- 授業実践報告についての質疑など
- 現職者研修と養成サイドの取り組み: 研究大会に向けて 柴田正美
- 発表に対する意見等
- 日本の図書館学教育/図書館員養成についての若干の問題提起 高山正也
- 課題の提起に対する意見等
- 本務校における学会等の開催可能性
- 求人/求職の調査について
- 各種の案内/報告類
- 次回以後の研究例会について
- No.100 (2002.07.27) 第 89 回研究例会 (2002.05.11) 報告
- パソコンを利用した映像教材の作成 – 情報検索演習での試みと可能性の検討
[Part II] 笠井詠子
- 追加報告と、画像の提示に関する質問など
- 21 世紀における京都府立図書館のめざすもの–市町村立図書館とのネットワークと国立国会図書館関西館との連携 小山雄一
- 発表に対する質疑等の内容から
- 各種の案内/報告類
- 船橋市立図書館の資料廃棄問題
- 次回以後の研究例会について
- 「100 号目」にして、初めての「編集後記」
- No.101 (2002.08.27) 第 90 回研究例会 (2002.07.27) 報告
- 小倉親雄論文「デュイ分類法の形成過程」をトレースする (第 1 回) 辻 武夫
- 図書委員による学校図書館の改善 – 東総地区高等学校図書委員連絡協議会の活動を参考に – 川原亜希世
- 発表に対する質疑応答・意見
- 各種案内および報告事項
- 協議事項 (2002 年度事業計画、2002 年度研究大会に向けて)
- 次回以降の研究例会について
- No.102 (2002.12.21) 第 91 回研究例会 (2002.09.14) 報告
- 司書教諭養成科目を対象とした授業研究に関する一考察 – 教育学からのアプ

- ローチ
安藤友張
- 発表に対する質疑応答・意見
各種案内および報告事項
協議事項 (2002 年度事業計画、2002 年度研究大会に向けて)
次回以降の研究例会について
- No.103 (2003.02.22) 第 92 回研究例会 (2002.12.21) 報告
日本図書館史のテキストに関する一考察
岩猿敏生
発表に対する質疑応答・意見
小倉親雄論文「デュイ分類法の形成過程」をトレースする (Part II) 辻 武夫
各種案内および報告事項
協議事項 (2002 年度研究大会グループ発表、JLA 図書館学教育部会役員改選)
次回以降の研究例会
- No.104 (2003.05.24) 第 93 回研究例会 (2003.02.22) 報告
『インフォメーション・パワーの計画立案ガイド: 学習のためのパートナーシップの構築』に関する一考察
漢那憲治・平井むつみ・柳 勝文
発表に対する質疑応答・意見
各種案内および報告事項
協議事項 (2002 年度研究大会に向けて、JLA 図書館学教育部会役員改選、研究グループ助成申請)
次回以降の研究例会
- No.105 (2003.07.26) 第 94 回研究例会 (2003.05.24) 報告
図書館情報サービスの視点からみた情報探索行動
中島幸子
発表に対する質疑応答・意見
各種案内および報告事項
協議事項 (「資料組織演習」実習環境整備について、日本図書館研究会と学校図書館を考える会・近畿の共同学習会開催について)
次回以降の研究例会
- No.106 (2003.10.04) 第 95 回研究例会 (2003.07.26) 報告
司書教諭の発令の実態と司書教諭の仕事・役割を考える (Part2)
A: 司書教諭発令の現状; 箕面・豊中・枚方などについて
野本淳子
発表に対する質疑応答・意見
B: 司書教諭の資格に関する科目; カリキュラム新旧比較 渡辺信一・柴田正美

発表に対する質疑応答・意見

『読書』を通してのメディア・リテラシー育成の基礎

枝元益祐

発表に対する質疑応答・意見

各種案内および報告事項

協議事項 (学校図書館を考える会・近畿との共同研究、来年度の研究大会発表に向けて)

次回以降の研究例会

No.107 (2003.12.06) 第 96 回研究例会 (2003.10.04) 報告

情報リテラシーとインフォメーション・パワー

平井むつみ

専任司書教諭のいる学校・学校図書館の一事例

青山比呂乃

日本の学校図書館にインフォメーション・パワーをどう生かすか?

足立正治

司書教諭発令の現状 - 箕面市、豊中市、枚方市等について

北村幸子

司書教諭科目の新・旧規定の比較に関する私見

村田修身

各種案内および報告事項

協議事項 (学校図書館を考える会・近畿との共同研究、来年度の研究大会発表に向けて、「資料組織演習」科目教育環境整備計画 (中間報告): 吉田暁史)

次回以降の研究例会

No.108 (2004.02.14) 第 97 回研究例会 (2003.12.06) 報告

大学教育における著作権処理に関する考察 - 遠隔教育・e-learning にかかわる問題を中心として -

枝元益祐

質疑・応答

司書教諭発令の現状 - 箕面市、豊中市、枚方市等について

(司書教諭発令に関するアンケート 2003 年度<中間報告 2 >)

北村幸子

学校図書館司書教諭講習科目: 旧科目から新科目への移行と展開 - 旧科目「図書以外の資料の利用」と「図書の整理」の場合 -

山田泰嗣

協議事項 (学校図書館を考える会・近畿との共同研究、来年度の研究大会発表に向けて、「資料組織演習」科目教育環境整備計画 (中間報告))

No.109 (2004.05.29) 第 98 回研究例会 (2004.02.14) 報告

KALIPER プロジェクトに関する一考察 - Durrance 教授の講演から -

中島幸子

質疑応答

司書教諭の発令の実態と司書教諭の仕事を考える

北村幸子

- 司書教諭養成の立場から
報告・案内事項 柴田正美
- No.110 (2004.07.17) 第 99 回研究例会 (2004.05.29) 報告
同志社図書館学の黎明期 – 小野則秋の業績を中心として 渡辺信一
質疑・応答
アメリカの大学図書館利用教育論 – 19 世紀最後の四半世紀を中心に –
大城善盛
協議事項 (学校図書館を考える会・近畿との共同研究、「資料組織演習」科目教育環境整備計画 (中間報告)、2003 年度決算報告)
- No.111 (2004.10.30) 第 100 回研究例会 (2004.07.17) 報告
(記念講演) 図書館学の世界 岩猿敏生
質疑・応答
協議事項 (「資料組織演習」科目教育環境整備計画 (中間報告): 吉田暁史)、
2003 年度決算報告、研究大会に向けての事業計画)
- 番外 (2004.11.13) 臨時研究例会 (2004.10.30) 報告
Librarianship in Thailand: Case study Sirindhorn Isan Information Center
Academic Resource Center Mahasarakham University Thailand
Manochai, Pornpimol
協議事項 (2003 年度決算報告、研究大会に向けての事業計画)
- No.112 (2005.01.29) 第 101 回研究例会 (2004.11.13) 報告
LIPER について: その発展的方向性 柴田正美
質疑・応答
協議事項 (研究大会のグループ研究発表について、学校図書館を考える会・近畿との共同研究に関わる負担金の出資について、JLA 図書館学教育部会の役員選挙について)
- No.113 (2005.03.26) 第 102 回研究例会 (2005.01.29) 報告
大阪市立大学大学院の図書館情報学教育について 北 克一
質疑・応答
協議事項 (研究大会のグループ研究発表について、JLA 図書館学教育部会の役員選挙について)
- No.114 (2005.05.14) 第 103 回研究例会 (2005.03.26) 報告
「メディア活用能力」の育成に於ける課題 枝元益祐

研究集会の報告及び案内事項

協議事項 (2005 年度事業計画: 研究大会に向けて、JLA 図書館学教育部会の役員選挙について)

No.115 (2005.07.16) 第 104 回研究例会 (2005.05.14) 報告

小野則秋氏の人と業績: 同志社時代と佛教大学時代 – 同志社図書館学の黎明期における一断面 – 渡辺信一

小野則秋先生と佛教大学: 通信教育課程のテキストから偲ぶ 山田泰嗣
司書・司書教諭養成科目に於ける授業改善・改革 (FD) の研究 (その 1) 柴田正美

研究集会の報告及び案内事項

協議事項 (2005 年度事業計画: 研究大会に向けて、図書館学教育研究グループ代表が渡辺信一氏から柴田正美氏 (帝塚山大学) に交代)

No.116 (2005.09.24) 第 105 回研究例会 (2005.07.16) 報告

情報活用能力育成における学校図書館の教育的機能について – 総合学習との関連から – 中島幸子

司書・司書教諭養成科目に於ける授業改善・改革 (FD) の研究 (その 2: アンケートの実施について) 柴田正美

研究集会の報告及び案内事項

No.117 (2005.11.19) 第 106 回研究例会 (2005.09.24) 報告

授業実践「コミュニケーション論」 – 問題提起として – 柳 勝文
協議事項 (研究大会に向けて、学会「LIPER」プロジェクト)

No.118 (2006.01.21) 第 107 回研究例会 (2005.12.10) 報告

教育行政と学校図書館 中里隆憲

協議事項 (研究大会に向けて)

研究集会の報告及び案内事項

次回以降の研究例会について

No.119 (2006.03.25) 第 108 回研究例会 (2006.01.21) 報告

司書・司書教諭養成課程の FD 柴田正美
協議事項 (研究大会に向けて)

No.120 (2006.06.03) 第 109 回研究例会 (2006.03.25) 報告

図書館情報学教育の可能性: LIPER の紹介を通じて 根本 彰
協議事項 (今後の図書館学教育研究グループの方向性について)

研究集会の報告及び案内事項

次回以降の研究例会について

No.121 (2006.09.30) 第 110 回研究例会 (2006.06.03) 報告

授業実践「読書と豊かな人間性」：発表とディスカッション

司書教諭課程科目「読書と豊かな人間性」の講義について

梓 加依

司書教諭科目「読書と豊かな人間性」について

深井耀子

「読書と豊かな人間性」の講義について

漢那憲治

「読書と豊かな人間性」における幾つかの視座 – 教員養成課程における司書教諭資格の位置付け –

枝元益祐

各種研究会のご案内/ご報告

次回以降の研究例会案内

No.122 (2006.11.18) 第 111 回研究例会 (2006.09.30) 報告

司書課程カリキュラムの 10 年 – カリキュラム制定時の経緯など –

渡辺信一

1996 年カリキュラムの課題と展望

柳 勝文

各種研究集会の報告・案内

次回以降の研究例会について

No.123 (2006.12.16) 第 112 回研究例会 (2006.11.18) 報告

私の FD: 司書課程カリキュラムの新たな展開

柴田正美

各種研究集会の報告・案内

協議事項 (研究大会に向けて)

次回以降の研究例会について

No.124 (2007.01.27) 第 113 回研究例会 (2006.12.16) 報告

沖縄の学校図書館: 過去・現在・未来

漢那憲治

協議事項 (研究大会に向けて、漢那先生とともに沖縄の図書館を訪ねる)

各種研究集会の報告・案内

次回以降の研究例会について

No.125 (2007.03.17) 第 114 回研究例会 (2007.01.27) 報告

1996 年カリキュラムの諸問題と今後の展開

柳 勝文

協議事項 (漢那先生とともに沖縄の図書館を訪ねる)

次回以降の研究例会の案内

No.126 (2007.05.19) 第 115 回研究例会 (2007.05.19) 報告

沖縄の図書館について

- 沖縄本島の学校図書館 平井むつみ
 琉球大学附属図書館 山中康行
 沖縄の図書館 柳 勝文
 協議事項 (研究大会に向けて、12 月例会 (第 120 回) の構成について)
- No.127 (2007.07.22) 第 116 回研究例会 (2006.06.02) 報告
 同志社女子大学司書・司書教諭課程のこれから 村木美紀
 協議事項 (研究大会に向けて、12 月例会 (JLA 図書館学教育部会との共催) の
 構成について)
- No.128 (2007.09.22) 第 117 回研究例会 (2007.07.22) 報告
 国立国会図書館と私 宇治郷 毅
 IFLA ソウル大会の報告 – 韓国の公共図書館を中心に 宇治郷 毅
 発表を聞いて
 他の研究会 (案内)
 次回以降の研究例会
- No.129 (2007.10.27) 第 118 回研究例会 (2007.09.29) 報告
 JLA 図書館学教育部会の取り組み 志保田 務
 協議事項 (研究大会に向けて)
 各種研究集会の報告・案内
 次回以降の研究例会
- No.130 (2007.12.08) 第 119 回研究例会 (2007.10.27) 報告
 夏の国際学会・国際会議参加報告: IASL, IFLA 大会に参加して 中村百合子
 他の研究会の報告とお知らせ
 今後の研究例会予定
- No.131 (2008.02.02) 第 120 回研究例会 (2007.02.08) 報告
 JLA 図書館学教育部会の研究集会と共催であった
 日本図書館協会の図書館学教育部会の活動と図書館関係文部科学行政 志保田 務
 司書養成制度をめぐる国の動向 – 図書館法と省令科目の改正を中心に –
 糸賀雅児
 知識情報社会における情報専門職養成とそのコア領域 – 大阪市立大学大学院
 創造都市研究科都市情報学専攻のカリキュラム構成から – 北 克一
 司書課程は何を教えられるのか; 教員として考えていること 川原亜希世

椋山女学園大学・司書課程の現状 – 短期大学～文化情報学部～全学開放課程 –
深井耀子

女子大学における司書課程の役割と学内カリキュラムにおける位置づけ –
京都ノートルダム女子大学の取組から – 岩崎れい
今後の研究例会予定

No.132 (2008.03.22) 第 121 回研究例会 (2008.02.02) 報告

近畿地区大学図書館における司書採用の現状

川原亜希世・中道厚子・馬場俊明・前川和子・横山 桂

協議事項 (研究大会に向けて)

今後の研究例会予定

No.133 (2008.05.31) 第 122 回研究例会 (2008.03.22) 報告

国立国会図書館関西館の活動と図書館・図書館員の社会的役割について

和中幹雄

質疑応答・意見など

No.134 (2008.06.21) 第 123 回研究例会 (2008.05.31) 報告

Web およびモバイル Web 環境下における教具・副教材の作成と利活用

桂 啓壯

その他の研究例会案内

今後の研究例会予定

No.135 (2008.07.24) 第 124 回研究例会 (2008.06.21) 報告

「図書及び図書館史」の試み – 龍谷大学の場合

日下幸男

協議事項 (図書館法改正に向けての動き)

次回以降の研究例会について

研究集会案内事項

No.136 (2008.09.20) 第 125 回研究例会 (2008.07.24) 報告

LIPER2 検定試験の意義: ポスト LIPER 報告と図書館員養成教育 根本 彰

次回以降の研究例会について

研究集会の案内

No.137 (2008.11.01) 第 126 回研究例会 (2008.09.20) 報告

図書館員養成における遠隔教育の可能性 – 米国を中心として – 瀬戸口 誠

次回以降の研究例会について

研究集会の報告及び案内事項

- No.138 (2009.01.10) 第 127 回研究例会 (2008.11.01) 報告
 地域性を意識した司書養成の試み 桂 まに子
 協議事項 (「大学における図書館に関する科目」の設定について)
 次回以降の研究例会について
 研究集会の案内
- No.139 (2009.03.28) 第 128 回研究例会 (2009.01.10) 報告
 「大学における科目」策定の動きと今後の展望 川崎秀子
 意見発表
 新・司書課程科目構成案 田窪直規・川原亜希世
 新カリキュラムに向けての準備を検討する 柴田正美
 協議事項 (パブリック・コメントに対して)
 次回以降の研究例会について
 研究集会の案内
- No.140 (2009.05.30) 第 129 回研究例会 (2009.03.28) 報告
 米国学校図書館基準の新しい波:『21 世紀の学習者のための基準』 柳 勝文
 次回以降の研究例会について
 研究集会の案内
- No.141 (2009.07.25) 第 130 回研究例会 (2009.05.30) 報告
 「大学における図書館に関する科目」策定の動きと今後の課題 柴田正美
 次回以降の研究例会について
 研究集会の案内
- No.142 (2009.09.13) 第 131 回研究例会 (2009.07.25) 報告
 『要求にこたえる』をどう伝えるか 佐藤毅彦
 報告事項 (改正司書養成科目に関する説明会 (西日本) の報告) 柴田正美
 次回以降の研究例会について
 研究集会の案内
- No.143 (2009.10.03) 第 132 回研究例会 (2009.09.13) 報告
 日本図書館文化史研究会 2009 年度研究集会・総会と共催
 シンポジウム:「これからの図書館学教育と図書館史教育・研究」
 シンポジウム趣旨 小黒浩司
 省令科目をふりかえる - 戦後における司書・司書教諭養成体制を整理する - 柴田正美

日本の司書養成省令科目における図書館史関係事項の取り扱いについて

志保田 務

全体討議

次回以降の研究例会について

研究集会の案内

No.144 (2009.12.05) 第 133 回研究例会 (2009.10.03) 報告

『情報組織論』授業実践報告

和中幹雄

協議事項 (研究大会での発表について、2010 年 4 月以降の継続的テーマについて)

次回以降の研究例会について

研究集会の案内

No.145 (2010.02.06) 第 134 回研究例会 (2009.12.05) 報告

文献紹介: 同学研より新刊『アメリカの学校図書館基準に学ぶ』紹介

柳 勝文

協議事項 (京大周辺の図書館見学について、研究大会発表に向けて、4 月以降の研究課題について)

次回以降の研究例会について

研究集会の案内

No.146 (2010.05.15) 第 135 回研究例会 (2010.02.06) 報告

日図研・初期の事務局長 (書記長) 青木次彦氏: 人と業績

渡辺信一

日図研第 51 回研究大会での研究発表「新カリキュラムおよびそれへの移行にあたっての課題」について

佐藤毅彦・柴田正美

京大の図書館学関連の図書館見学 (報告)

慈道佐代子

協議事項 (京大周辺の図書館学関連の図書館見学について出席確認)

次回以降の研究例会について

研究集会の案内

No.147 (2010.07.24) 第 136 回研究例会 (2010.05.15) 報告

明星大学司書課程科目の移行

平井歩実

協議事項 (これからの研究テーマについて)

次回以降の研究例会について

No.148 (2010.09.23) 第 137 回研究例会 (2010.07.24) 報告

佛教大学における司書課程新カリキュラム編成のプロセスについて 松戸宏予

協議事項 (司書課程新カリキュラム編成における課題について)

次回以降の研究例会について

No.149 (2010.12.04) 第 138 回研究例会 (2010.10.23) 報告

1987 年頃から 1996 年頃までの図書館学教育部会 – 司書課程カリキュラムの
改定を中心に – 渡辺信一

協議事項 (研究大会での発表について)

次回以降の研究例会について

No.150 (2011.01.22) 第 139 回研究例会 (2010.12.04) 報告

省令科目の成立に影響を与えた諸要因について 川原亜希世・松崎博子

協議事項 (2010 年度の図書館学教育研究グループの活動報告)

次回以降の研究例会

研究集会及び講演会の案内

No.151 (2011.05.21) 第 140 回研究例会 (2011.01.22) 報告

省令科目の成立に影響を与えた諸要因について (発表概要)

川原亜希世・松崎博子

次回以降の研究例会

研究集会及び講演会の案内

No.152 (2011.07.23) 第 141 回研究例会 (2011.05.21) 報告

小野則秋の人と業績 – 同志社時代を中心に 渡辺信一

図書館学教育・研究者、小野則秋: その生涯と業績 渡辺信一・川崎秀子

協議事項 (JLA 図書館学教育部会の総会、2010 年度の決算報告、2011 年度の
予算案)

研究集会及び講演会の案内

No.153 (2011.10.01) 第 142 回研究例会 (2011.07.23) 報告

新カリキュラム科目「図書館情報技術論」シラバス試案 原田隆史

協議・報告事項 (2011 年度のグループ研究課題)

研究集会及び講演会の案内

No.154 (2011.11.19) 第 143 回研究例会 (2011.10.01) 報告

学校図書館司書教諭資格取得に資する科目の教科書研究: 第 1 回: 学校経営と
学校図書館 渡辺信一

協議・報告事項 (研究例会の予定、日本学校図書館学会の京都支部について)

研究集会の案内

- No.155 (2012.01.21) 第 144 回研究例会 (2011.11.19) 報告
 司書教諭講習科目「学校図書館メディアの構成」のテキストに関する考察: 資料選択に関連する記述と「教師としての役割」 松崎博子
 司書教諭養成科目の教科書について: 情報メディアの活用 柴田正美
 協議・報告・予告など
- No.156 (2012.05.19) 第 145 回研究例会 (2012.01.21) 報告
 「情報メディアの活用」「学校図書館メディアの構成」の教科書について 松崎博子・柴田正美
 司書教諭養成科目の教科書研究: 学習指導と学校図書館 平井むつみ
 協議・報告・予告など
- No.157 (2012.07.28) 第 146 回研究例会 (2012.05.19) 報告
 20 世紀と 21 世紀を駆け抜けた 私の学校図書館半生記 家城清美
 司書教諭養成科目の教科書研究: 読書と豊かな人間性 平井むつみ
 協議・報告・予告など
- No.158 (2012.09.29) 第 147 回研究例会 (2012.07.28) 報告
 学校図書館研究の今日的動向とその課題 枝元益祐
 司書教諭養成科目の教科書研究: 読書と豊かな人間性 Part2 平井むつみ
 協議・報告・予告など
- No.159 (2012.12.01) 第 148 回研究例会 (2012.09.29) 報告
 新しい学校図書館を支える人について 岡田大輔
 協議・報告・予告など
- No.160 (2013.02.09) 第 149 回研究例会 (2012.12.01) 報告
 研究討議: これからの学校図書館を支える人について
 2012 年度の研究大会に向けて
- No.161 (2013.04.20) 第 150 回研究例会 (2013.02.09) 報告
 研究・討議: これからの学校図書館を支える人たち
 今後の研究の方向に関して
 次回の研究テーマと内容
- No.162 (2013.05.18) 第 151 回研究例会 (2013.04.20) 報告
 (学校図書館司書教諭養成科目の教科書研究)
 科目: 学校経営と学校図書館 渡辺信一
 科目: 学校図書館メディアの構成 松崎博子

- | | |
|--|-------|
| 科目: 情報メディアの活用 | 松崎博子 |
| 科目: 学習指導と学校図書館 | 平井むつみ |
| 科目: 読書と豊かな人間性 | 平井むつみ |
| 学校図書館専門職に必要なもの
質疑と検討 | 岡田大輔 |
| 2013 年度の研究活動について | |
| No.163 (2013.07.20) 第 152 回研究例会 (2013.05.18) 報告 | |
| 学校図書館の現状と課題 | 頭師康一郎 |
| 司書教諭の仕事: 私がやってきたこと | 山田幸和 |
| 質疑応答 (まとめ) | |
| 今後の研究例会について | |
| No.164 (2013.09.21) 第 153 回研究例会 (2013.07.20) 報告 | |
| 図書館情報学の研究と教育にたずさわって | 佐藤 翔 |
| 出席者からの意見など (まとめ) | |
| 今後の研究例会について | |
| No.165 (2013.11.16) 第 154 回研究例会 (2013.09.21) 報告 | |
| 中学校 学校図書館司書教諭 報告 | 湯口香里 |
| 補足された説明など | |
| 今後の研究例会について | |
| No.166 (2014.01.25) 第 155 回研究例会 (2013.11.16) 報告 | |
| 学校図書館専門職員の養成・育成について | 柴田正美 |
| 研究・討議のあらまし | |
| 今後の研究例会について | |
| No.167 (2014.03.15) 第 156 回研究例会 (in 湯郷温泉) (2014.01.25~26) 報告 | |
| 発表された 3 つのテーマ | |
| 世界の国々では | 松崎博子 |
| わが国のこれまでの考え方を整理する | 岡田大輔 |
| 文部省の考えていた方向 | |
| 学校司書の仕事 | |
| 学校司書の養成 | 柴田正美 |
| 学校図書館専門職の育成 | |
| 研究・討議のあらまし | |

今後の研究例会について

No.168 (2014.05.17) 第 157 回研究例会 (2014.03.15) 報告

2013 年の会計報告

2014 年度の活動日程について

2014 年度の研究テーマについて

研究例会および研究グループの運営に関して

次回 (5 月 17 日) の研究例会について

No.169 (2014.07.19) 第 158 回研究例会 (2014.05.17) 報告

2014 年度の活動日程について

2014 年度の研究テーマについて

学校図書館学の授業で一斉読書に取り組んだ結果

山田幸和

学校図書館利用の 10 年

梅原由美子

No.170 (2014.09.27) 第 159 回研究例会 (2014.07.19) 報告

みんなで作る学校図書館専門職員テスト問題

岡田大輔

テスト問題をみんなで考える

今後について

次回の研究例会について

No.171 (2014.11.08) 第 160 回研究例会 (2014.09.27) 報告

学校司書の養成における現職者の再教育を考える – 司書講習の失敗から学ぶ –

川原亜希世

発表についての討議

テスト問題をみんなで考える

テスト問題を現職者にやってもらう

柴田正美

今後について

次回の研究例会について

No.172 (2015.01.24) 第 161 回研究例会 (2014.11.08) 報告

学校司書養成のカリキュラムについて考える

岡田大輔

発表についての検討

次回の研究例会について

No.173 (2015.03.28) 第 162 回研究例会 (2015.01.24) 報告

学校司書業務の見直しと学校司書カリキュラムの対照

頭師康一郎

発表についての検討

ワークショップ

次回の研究例会について

No.174 (2015.05.23) 第 163 回研究例会 (2015.03.28) 報告

『日本十進分類法』(新訂 10 版)をどう教えるか: 講義での解説変更部分を中心に(概要) 松田泰代

発表についての検討

「学校司書カリキュラムについて考える」発表その後 頭師康一郎

2015 年度の活動計画

次回の研究例会について

No.175 (2015.07.18) 第 164 回研究例会 (2015.05.25) 報告

学校司書養成カリキュラムを深める 岡田大輔

次回の研究例会について

No.176 (2015.09.19) 第 165 回研究例会 (2015.07.18) 報告

学校図書館情報資源論 岡田大輔

学校図書館施設論 松崎博子

学校図書館制度・学校図書館史 頭師康一郎

まとめ

次回の研究例会について

No.177 (2015.11.21) 第 166 回研究例会 (2015.09.19) 報告

中学校図書館の現状から司書を見る 湯口香里

学校図書館制度・学校図書館史 頭師康一郎

次回の研究例会について

No.178 (2015.12.19) 第 167 回研究例会 (2015.11.21) 報告

学校司書養成カリキュラム案 柴田正美

学校図書館司書の養成カリキュラムについて 岡田大輔

研究・討議

次回の研究例会・準備会について

No.179 (2016.01.16) 研究大会発表・準備会 (2015.12.19) 報告

学校司書養成カリキュラム案のねらい・検討課題について

岡田大輔・頭師康一郎

研究・討議

No.180 (2016.03.19) 第 168 回研究例会 (2016.01.16) 報告

- | | |
|--|-------------------------------|
| 菅谷明子さんの講演会について | 柴田正美 |
| 日本図書館協会の検討状況について | 松本直樹 |
| 学校司書養成カリキュラム (川原案) について | 川原亜希世 |
| 「学校図書館サービス論」の科目内容
研究・討議 | 頭師康一郎 |
| No.181 (2016.05.21) 第 169 回研究例会 (2016.03.19) 報告
2016 年度の研究計画について
学校司書の養成カリキュラムについて | 岡田大輔 |
| No.182 (2016.07.16) 第 170 回研究例会 (2016.05.21) 報告
学校司書の資格に関する「協力者会議」の動向
愛知淑徳大学人間情報学科における学校司書養成への取り組み
日本学校図書館学会による学校司書カリキュラム案の検討過程
3つの発表を通しての討議
次回の研究例会について | 川原亜希世
伊藤真理
枝元益祐 |
| No.183 (2016.07.16) 特別研究集会 (2016.06.25) 報告
研究集会の趣旨
JLA 『学校図書館職員問題検討会報告書 (案)』 の背景
JLA 『学校図書館職員問題検討会報告書 (案)』 の概要
文科省・学校司書の資格・養成等に関する作業部会について
研究・討議
まとめ、意見表明についての方針 | 柴田正美
川原亜希世
柴田正美
岡田大輔 |
| No.184 (2016.09.17) 第 171 回研究例会 (2016.07.16) 報告
『学校司書の資格、養成・研修の在り方について: 中間報告』 (日本学校図書館
学会 2015) の検討
質疑と討議
次回の研究例会について | 川原亜希世 |
| No.185 (2016.11.19) 第 172 回研究例会 (2016.09.17) 報告
近畿地区の司書課程、特論の開講状況とその特徴
近畿大学における「特論」科目
意見交換
夏に開かれた図書館関係の行事
研究大会について | 枝元益祐
川原亜希世 |

- 次回の研究例会について
- No.186 (2017.01.21) 第 173 回研究例会 (2016.11.19) 報告
「学校司書のモデルカリキュラム」まとめ 岡田大輔
意見交換
- 次回の研究例会について
- No.187 (2017.03.25) 第 175 回研究例会 (2017.01.21) 報告
大学司書課程における 2016 年度「図書館実習」開講状況 川原亜希世
意見交換
学校教育と学校図書館について 塩見橘子
意見交換
- 次回の研究例会について
- No.188 (2017.05.20) 第 176 回研究例会 (2017.03.25) 報告
2017 年度の活動計画
学校司書モデルカリキュラムに対応した司書科目「情報サービス論」の内容構築 岡田大輔
意見交換
- 次回の研究例会について
- No.189 (2017.07.15) 第 177 回研究例会 (2017.05.20) 報告
次回以降の活動について
司書科目「図書館情報技術論」をどう教えるか 枝元益祐
意見交換
- 次回の研究例会について
- No.190 (2017.09.30) 第 179 回研究例会 (2017.07.15) 報告
次回の予定等連絡
「学校図書館情報サービス論」の授業の構築 川原亜希世
意見交換
- 次回の研究例会について
- No.191 (2017.11.18) 第 180 回研究例会 (2017.09.30) 報告
学校司書のモデルカリキュラムの質保証と課題 大谷康晴
意見交換
日本図書館研究会研究大会での発表について
次回の研究例会について

- No.192 (2018.01.20) 第 180 回研究例会 (2017.11.18) 報告
 授業実践「図書館制度・経営論」：問題提起として
 意見交換
 次回の研究例会について
 坂本 俊
- No.193 (2018.03.17) 第 181 回研究例会 (2018.01.20) 報告
 学校図書館マイスター協会とは
 意見交換 (1) (2)
 次回の研究例会について
 柴田正美
- No.194 (2018.05.19) 第 182 回研究例会 (2018.03.17) 報告
 図書館の現場と大学教育課程をつなぐ
 質疑と意見交換
 日本図書館研究会特別研究例会の案内
 世界の学校図書館司書教諭を取材した本の紹介
 来年度の研究例会及び運営体制について
 次回の研究例会について
 坂下直子
- No.195 (2018.07.21) 第 183 回研究例会 (2018.05.19) 報告
 図書館文化史研究会研究大会での発表について
 新しいアメリカの学校図書館基準：歴史と課題
 質疑と意見交換
 当研究グループの次期運営体制について
 次回の研究例会について
 柴田正美
 柳 勝文
- No.196 (2018.09.22) 第 184 回研究例会 (2018.07.21) 報告
 グループ代表交代について
 グローバル人材育成に果たす図書館の役割に関する考察
 質疑と意見交換
 日本図書館研究会研究大会での発表テーマと次回以降の研究例会テーマにつ
 いて
 次回の研究例会について
 枝元益祐
- No.197 (2018.11.17) 第 185 回研究例会 (2018.09.22) 報告
 新学習指導要領を学ぶ - 新学習指導要領に対応した養成カリキュラムを考える
 質疑と意見交換
 岡田大輔

日本図書館研究会研究大会での発表と次回以降の研究例会テーマについて
次回の研究例会について

No.198 (2019.01.26) 第 186 回研究例会 (2018.11.17) 報告

学校司書モデルカリキュラムの実施状況を調べる (1)	川原亜希世ほか
学校図書館概論	坂下直子
図書館情報技術論	坂本 俊
図書館情報資源概論	川原亜希世
情報資源組織論	高畑悦子
情報資源組織演習	柳 勝文
学校教育概論	岡田大輔
学習指導と学校図書館	塩見橘子
読書と豊かな人間性	坂下直子
学校図書館サービス論	川原亜希世
質疑と意見交換	

2月16～17日、日本図書館研究会研究大会での発表について
次回の研究例会について

No.199 (2019.03.16) 第 187 回研究例会 (2019.01.26) 報告

学校司書モデルカリキュラムの実施状況を調べる (2)	川原亜希世ほか
「学校図書館情報サービス論」の検討	岡田大輔
質疑と意見交換: 研究大会発表予定内容について	
2019年3月以降の研究例会スケジュール等について	
次回研究例会について	

No.200 (2019.05.18) 第 188 回研究例会 (2019.03.16) 報告

学校司書モデルカリキュラムの実施状況を調べる (3)	川原亜希世ほか
大会の振り返り	岡田大輔
各大学へのアンケート	岡田大輔・川原亜希世
質疑と意見交換: 研究大会発表予定内容について	
アンケート調査について	
『基本件名標目表第4版』標目追加(案)第3次について	柴田正美
学校図書館に関する資料、情報提供	
学校図書館における『多様性』を考える～「困り感」への対応についての実践報告	土田由紀

各地の学校図書館に関する情報交換
次回研究例会について

研究例会の発表者索引

第1回研究会～第200回研究会

(発表者の名前 発表例会回次数)

(年.月)のものは回次がついていない臨時の会合である

青山比呂乃	96
梓 加依	110
荒岡興太郎	77
安藤友張	91
家城清美 (4)	79, 81, 82, 146
石塚栄二 (7)	7, 10, 11, 45, 58, 63, 75
伊藤真理	170
糸賀雅児	120
稲垣 彩	192
井上裕雄	64
井上靖代	82
岩崎れい (3)	68, 83, 120
岩猿敏生 (9)	32, 33, 43, 54, 56, 79, 84, 92, 100
宇治郷 剛	117
梅原由美子	158
枝元益祐 (10)	78, 95, 97, 103, 110, 147, 170, 172, 177, 184
大城善盛 (3)	23, 24, 99
大谷康晴	179
岡田大輔 (28)	(2015.12), (2016.6), 148, 151, 156, 159, 159, 161, 164, 165, 167, 169, 173, 176, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199
尾原淳夫	6
鍵本芳雄	47
笠井詠子 (2)	88, 89
桂 啓壮	123

桂 まに子 127
 加藤三郎 (2) 59, 65
 川崎秀子 (3) 128, 136, 141
 川原亜希世 (21) (2016.6), 80, 90, 120, 121, 128, 139, 140, 160, 168, 170, 171, 172,
 175, 178, 186, 189, 193, 197, 199, 200
 漢那憲治 (4) 80, 93, 110, 113
 北 克一 (2) 102, 120
 北村幸子 (4) 64, 96, 97, 98
 木村 稔 (2) 72, 85
 日下幸男 124
 倉橋英逸 (4) 42, 52, 70, 79
 コーンハウザ 由香子 (2) 70, 83
 小山雄一 89
 坂下直子 (2) 182, 186
 坂本 俊 (5) 180, 186, 193, 197, 199
 佐藤 翔 153
 佐藤毅彦 (4) 23, 54, 131, 135
 佐野友彦 (2) 46, 56
 澤 利政 69
 塩見橘子 (2) 175, 186
 塩見 昇 (12) 1, 2, 6, 14, 16, 18, 20, 22, 24, 25, 32, 66
 柴田正美 (55) (2016.6), 2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 14, 19, 29, 32, 33, 34, 35, 36,
 37, 38, 40, 41, 42, 43, 44, 51, 55, 58, 61, 69, 76, 77, 84, 85, 86, 88, 95, 101,
 104, 105, 108, 112, 128, 130, 131, 132, 144, 145, 155, 156, 160, 167, 181,
 188, 195
 志保田 務 (4) 3, 118, 120, 132
 慈道佐代子 135
 頭師 康一郎 (7) (2015.12), 152, 162, 163, 165, 166, 168
 鈴木幸久 28
 鈴木嘉弘 (2) 74, 76
 瀬戸口 誠 126
 高畑悦子 (4) 186, 189, 197, 200

高山正也	88
田窪直規 (8)	24, 31, 42, 56, 59, 76, 82, 128
辻 武夫 (2)	90, 92
土田由紀 (2)	181, 188
天満隆之輔	20
戸田久美子 (3)	79, 81, 82
戸田光昭 (3)	41, 68, 74
中井正子	49
中川正己	78
中里隆憲	107
中島幸子 (4)	81, 94, 98, 105
中田 彩	192
中道厚子	121
中村百合子	119
二宮博行	69
二村 健	48
根本 彰 (2)	109, 125
埜上 衛 (3)	3, 33, 34
野本淳子	95
服部敦司	21
原田圭子	55
原田 隆	142
馬場俊明	121
平井歩実	136
平井むつみ (7)	93, 96, 115, 145, 146, 147, 151
深井耀子 (3)	20, 110, 120
L・ポンパン助教授	54
前川和子	121
松崎博子 (7)	139, 140, 144, 145, 151, 156, 165
松田泰代	163
松戸宏予	137
松本直樹	168

Pornpimol Manochai (2004.10)

丸本郁子	60
南山和男 (2)	63, 64
村木美紀	116
村田修身 (7)	16, 51, 53, 58, 63, 75, 96
村松常葉 (3)	79, 81, 82
校條善夫	73
森 耕一 (2)	1, 6
柳 勝文 (16)	71, 75, 79, 81, 82, 93, 106, 111, 114, 115, 129, 134, 183, 186, 197, 200
山田郁文	80
山田泰嗣 (7)	17, 24, 36, 67, 81, 97, 104
山田幸和 (2)	152, 158
山中康行	115
山本貴子	53
湯口香里 (2)	154, 166
横山 桂	121
吉川有智子	87
劉 曉晴	26
渡辺信一 (39)	(1990.5), 1, 2, 5, 6, 7, 9, 10, 12, 14, 15, 16, 23, 24, 29, 30, 32, 33, 34, 37, 39, 43, 44, 45, 47, 55, 58, 61, 74, 75, 95, 99, 104, 111, 135, 138, 141, 143, 151
渡邊隆弘	195
和中幹雄 (2)	122, 133

当研究グループの活動にまつわる思い出

この部分は、当研究グループの関係者の多くが、エッセイを綴ることで、当時の図書館や司書養成の状況とグループの50年の歴史やその役割が浮かび上がることを目指しました。また、グループの活動を懐かしみ、その思い出を皆で共有することもできると考えています。

伝統への真の理解とは

根本 彰

主として東京圏で仕事をしているものから見て、関西を拠点として全国に拡がる日本図書館研究会の活動からいろいろと刺戟を受けている。それは、図書館の研究を西洋の文化的伝統に位置付けようとして、では日本の伝統はどうかと考え始めているからである。

最近、作家池澤夏樹が、林達夫と久野収の対談集『思想のドラマトゥルギー』（平凡社ライブラリー、1993）の解説のなかで「ヨーロッパを19世紀だけで見たのは明治以降の日本の思想界の大きな欠陥だった」と書いている文章を目にした。これは林達夫という碩学が、日本の近代思想家には稀な西洋思想に対する幅広く深い理解をもっていたという指摘のなかに出てくる。そういえば、思想に限らず、政治行政も産業開発も社会制度もすべてが西洋のものまねから始まったが、そこで真似してきたのは19世紀以降の西洋であった。ところが西洋の19世紀はギリシア以来の2000年以上の歴史の結果であり、すべてが過去を背負っている。だから表面だけをなぞるとたいへんな間違いを犯す可能性がある。

そうした意識は関西の人たちには強くあるのではないだろうか。この対談をしている林達夫と久野収はいずれも京都大学で学び西洋と日本を結びつけることに意を注いだ人たちだった。また、ここでとられている対談という知の方法は京都の町衆や大坂の町人たちが保持してきた談話文化の延長にあるものだろう。それは図書館についても当てはまる。というよりも、図書館こそがそうした伝統に寄り添い、また伝統をつくるために存在してきた存在だったから、19世紀以降だけを見ていたのではだめだということになる。対談によると、林は戦前に上野図書館（帝国図書館）の図書館学校（図書館講習所）で半年だけ西洋書誌学を教えたことがあるそうだ（p.68）。

かつて岩猿敏生は「九州と三人の図書館史家：竹林熊彦、小野則秋、永末十四雄」（『図書館学』（93）、1-12、2008）という論文を書いた。なぜ九州だったのかということを描いても、彼自身も含めてここに名前の挙がっている4人の図書館研究者の業績は日図研のカルチャーのなかで醸成され花開いたと言えよう。明治以降の政府が、西洋のアーカイブ装置としての図書館について表面だけをすくい取った政策を振り回したり、他方では無視したりしてきたことに対する真の批判的研究は、長い文化的伝統を誇り、また人間的密度の高い教育研究活動を蓄積してきた関西の人たちから生まれるのかもしれない。

図書館学教育研究グループでの学び

川原 亜希世

(近畿大学司書課程担当)

2000年の春、私は結婚を機に関西に移り、近畿大学で働き始めた。そして同僚の田窪先生に勧められ、図書館学教育研究グループの研究例会に参加するようになった。以前、北陸で働いていた頃には、他大学の司書課程の教員と集まるような機会はなかった。だから初めは、そのような場に参加できることがただ嬉しく、同志社大学がある京都への遠出が楽しみだった。参加される方の多くが年長者で、そのなかでは自分が学生に戻ったような気分になって、楽しかった。

最初に参加した研究例会で、図書・図書館史の教材が紹介されたのを覚えている。私はその時に紹介された『本のれきし 5000年』という絵本をすぐに購入し、自分の授業で使い始めた。実は今でも、情報資源史の授業で使っている。この絵本は絵や写真を使って、パピルスや粘土板などのメディアの初めの話や、紙の製法の伝播の話、活版印刷術の話ができるのでとても便利なのである。毎年大学生を相手に、絵本の読み聞かせのようなことをしている。

研究例会に参加するようになって間もなく、私は前の短大で行っていた、ビデオを用いた授業について発表した。前任校の図書館には、司書課程教育や図書館利用教育のための教材ビデオが揃っていて、私はそれを活用していた。ビデオの視聴、教科書を使った説明、図書館での演習と、授業の中で学生に、同じ内容を違うメディアで繰り返し学ばせることによって、記憶に定着させる効果を狙ったことを発表した。

近畿大学でも司書課程の授業のために、ビデオ教材を揃えた。近畿大学は前任校の短大と比べ、司書課程の履修学生の数が1桁多かった。そのため学生を連れて図書館に行くことも、手元で資料を見せることも難しくなってしまった。ビデオの視聴はそれらの代用としても役立った。今でもビデオテープをDVDに変換して使っている。

私は司書課程の教員になる前、埼玉で専門図書館の司書として3年間、図書館経営に携わっていた。北陸の短大の教員になったとき、私は図書館経営ができる司書の養成を目指した。しかし短大の小さな司書課程では、これは無謀な試みだった。気がつく私の関心は、司書養成の手前の、図書館利用教育になっていた。当時の私が授業を組み立てるには、図書館経営ができる司書というゴールよりも、まず図書館が利用できるようになるという、学生たちのスタート地点に目を向ける必要があったのである。

近畿大学に移ると、講義科目の担当が増え、教える内容が多くなった。図書館学教育研究グループの活動を通じて、私は「教えること」への関心を高めていった。ビデオ教材を使ったり、附属図書館と協力し、学生を図書館ツアーや情報検索ガイダンスや貴重書展、学生選書の会への参加を授業の課題にしたりした。大きな大学の司書課程だからできることもあれば、できないこともある。自分自身が「図書館実習」を研究したにもかかわらず、未だ自分の大学でその授業を開講できずにいる。

私の研究テーマは図書館員養成教育である。だが、私の研究は広い庭をあちこち掘り返しているようなもので、個々の穴は大して深くはない。この22年間、図書館学教育研究グループの活動に、楽しく参加させていただき、感謝している。2018年からグループの代表を務めているが、未だ自分が学んだことに対する恩返しには至っていない。

研究例会では未だに学生気分である。私は実際、大学時代に、ゆうりす公共図書館研究会というサークルを立ち上げ、図書館見学や勉強会に明け暮れていたことがある。研究例会での議論は、その頃を思い出させる。ただ学ぶことが楽しかったころの自分に戻る気がするのである。でも、だからこそ、このグループの活動を大切に、長く続けていきたいと考えている。

50年後の図書館学教育研究グループ

岡田 大輔

(相愛大学人文学部)

私が最初にこのグループの例会に参加したのは2012年のことで、それほど古いことではありません。ただ、私にとっては一番長く参加し続ける会になっています。

何度か参加すると、すぐに発表の機会を頂きました。発表の際には、渡辺信一先生が黒板に私の氏名と発表テーマを縦書きであの筆跡で書いていただき、写真に残しておけばよかったと悔やまれます。その後、私が発表を引き受けたものの、私から発表テーマを連絡せず、『図書館界』で自分の発表テーマを知るといったこともありました。

龍谷大学の深草町家キャンパスが会場だったこともありましたが、ここは畳敷きで私は好きでしたが、多くの方にとってアクセスが悪く、龍谷大学大宮学舎へと移っていきます。これらは柳氏の取り計らいによるものです。情報組織化研究グループとの合同の例会も何回か開かれました。今後も定期的開催できればと思っています。

コロナになり、日図研の大会も中止になる中、この会は比較的早くからオンラインで開き続けることができたことと自負しています。オンラインは現在まで続いており、近畿圏以外からの定期的な参加もいただけるようになりました。

さて、さらに50年後のこのグループはどうなっているのでしょうか。

悪い方に捉えるほうは簡単です。オンライン授業が進み、他大学と授業が統合され、その結果各大学に司書課程を担当する教員がほぼいなくなれば、このグループに入る人は相当減るでしょう。司書課程・司書教諭課程といった日本のシステムだけでなく、図書館情報学という学問自体もあるかは分かりません。

良い方に捉えれば、自動翻訳の技術が上がり、海外の人も含めてオンラインで深い議論ができるようになるでしょう。海外の図書館情報学教育の知見も取り入れ、より良い養成教育についてこのグループが発信していくことができるはずです。そうすれば、“世の中の司書への期待 – より力を持った司書の養成”といった好循環につながります。そうなるよう、今のメンバーと新しいメンバーでやっていければと思いますし、みなさま気軽に参加していただければと思います。

グループ通信と大学図書館の思い出

高畑 悦子

(佛教大学非常勤講師)

私が初めて図書館学教育研究グループに参加させていただいたのは前職の私立大学に勤務していた2015年5月、松田泰代先生が情報資源組織論と分類の授業実践を発表される研究例会でした。私は幸いにも私立大学の図書館で司書として社会人生活を始めることができましたが私立大学でよくあるように、その後図書館外への人事異動を大きくは2度経験し、そのときも研究所の事務を担当していました。入職時は大学図書館司書見習い、整理係として目録カードの複写、配列、装備作業に始まり、その後和書、洋書の整理(目録、分類、資料管理)、閲覧、レファレンス担当、そして後年は管理の仕事になりましたが、整理業務(情報資源組織)には絶えず関心があったため、他の研究会でたまたまお会いした柴田正美先生からお誘いをいただいたのでした。

初めて参加した教育者の先生方の研究会は、それまで参加していた現場の図書館員が中心の研究会とは違い、私はなんとも場違いな存在だなと思ったことを覚えています。資料として配付された、前回例会の内容を収録した「図書館学教育研究グループ通信」(以下、G通信)にさすが柴田先生と思いました。というのは国立大学の司書職であられた頃にご一緒に研究会の記録作成をしていたことがあったからです。

私が大学図書館員になった1980年前半を振り返ると、学術情報システム(NACSIS-CAT)の実施に向けて東京大学の図書館では学術情報システムのプロトタイプを使った業務が始まり、旧7帝大と言われる大規模国立大学等の図書館に図書館業務の電算化(当時は「機械化」という言葉も多く使われていました。)予算がついて、目録を含むコンピュータ処理が開始される時期でした。複数の国産コンピュータメーカーで大規模大学図書館用のシステムが開発されていき、さらにその後中規模国立大学図書館の電算化へと進んで、兵庫教育大学図書館において日本電気(NEC)のパッケージシステムLICSUが開発される¹⁾などして、私大を含めた中小規模大学図書館の電算化が進んでいくことになります。私立大学図書館や短大図書館等で心配されたNACSIS-CATへの参加は、所蔵情報の登録とILLへの資料提供といった条件をクリアすれば参加費や利用料金なしで利用できることになり、書誌ユーティリティを使った運営をすることが大学図書館にとっての所与となっていきますが、その「入り口」となる時期でした。

柴田先生とは、司書一年目に職場の先輩と参加した図書館見学会でお会いする機会

がありました。日本図書館研究会の10年ごとの回顧でレビューの執筆者としてお名前は拝見し存じていましたが、現在の国立情報学研究所の前身となる学術情報センターの前の東京大学情報図書館学研究センターで「学術雑誌総合目録」の編纂に当たられたことも当時の私は知りませんでした。民博(現・大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立民族学博物館)の情報管理施設室長に転属され、既にコンピュータを業務で運用される、この分野のエキスパートでした。そしてまもなく大学図書館員をメンバーにして研究会をしようということになり、私も参加させてもらい、そこで先生と記録係の役を、研究会が活動を終了するまで担当しました。

その後、三重大学の助教授に転身されましたが、歴史を専攻され、記録を残すことを大切に、実践される姿勢はまったく変わっておられないことを知ったのでした。

2016年度末で30数年勤めた大学を退職することを決め、何人かの知人に年賀状で知らせたところ、通信教育課程の司書課程教員のお話をくださる方がおられて、司書教育に携われることとなりました。勉強のために2017年3月から図書館学教育研究グループに参加させていただいたところ、まもなく柴田先生が体調を崩されて研究例会参加が叶わないということで、5月例会分から記録(G通信)の作成のご依頼があり、その後担当することとなりました。利用者教育は担当していましたが、司書課程のことも大学図書館以外の館種のこともまったく知識が足りません。知らない用語がどんどん出てくる研究例会のこと、メモと当日の配付資料を元に原稿を作成しますが、発表者の方の大部で詳細な内容をほとんどそのまま入れさせていただいたり、ご発表後の質疑や意見交換も、いざ文章化しようとすると言の前後の文脈がわからないけれど拾っておきたいなど迷うことばかりで、大変大部なG通信にしてしまいました。

記録担当のもう一つの仕事に、『図書館界』に掲載していただける研究例会報告の原稿作成がありました。こちらは字数も限られるため、縮約するのにたいへん苦勞しました。二つ作る苦勞はありながらも、誌上の報告を見て関心を持ち参加してみようと思うことは自身を振り返ってもよくあることで、新たな参加者を得るための重要な媒体です。日本図書館研究会(以下、日図研)の財政上の問題から、2021年度から例会案内のみの掲載となったことはたいへん残念でした。

2021年、日図研の75周年記念で、先に渡辺信一先生がまとめられた研究グループの50年に続く、25年をまとめさせていただきました。²⁾ 司書課程科目(省令科目)の改正に向けて日本の図書館学教育関係者全体で尽力されたこと、その後学校図書館法の改正、そして改正後は、よりよい授業内容としていくための教科書や授業実践

の研究、発表に取り組まれてきたことが G 通信でわかり、記録の大切さを痛感しました。

財政難など図書館現場を取り巻く状況は厳しく、そしてインターネット、新型コロナウイルス禍、AI 技術の開発と図書館を取り巻く社会、環境は激しく変化して、教育内容の改訂が求められる分野もあります。長く研究や経験を積まれた方、若い方、それぞれが知っておられることがあります。この研究グループが、幅広い年代や経験を持つ方々が集まり、情報交換や共有ができる場になるとともに、図書館員養成に役立つ研究成果をつくり、発信していく場であり続けることを願っています。

- 1) 山田常雄, 笹川郁夫, 石井道悦「兵庫教育大学図書館業務電算化システム」 大学図書館研究 (25), pp14-24, 1984.11
- 2) 高畑悦子「図書館学教育研究グループの 25 年」 図書館界 73(4), pp266-267, 2021.11

異議申し立て、トリックスター、ミネルバのフクロウ

柳 勝文

(事務局、龍谷大学教授)

グループに長くかかわり、また今般多様な原稿を頂戴して考えた3点を挙げる。

まず、異議申し立て。今回は第2次1987年以降ということであるが、このことは第1次に遡ることができるのではないか。日図研25周年のときに十分つまびらかにできなかったのかもしれないが、高橋重臣日図研理事が第1次グループを理事会の承認を得て発足させたのは日本図書館協会図書館学教育部会の図書館学教育改善試案への異議申し立てではなかったか。全国的な機関の一部会が掲げた試案をクリティカルに組織立って議論する正当性を持たせるために日図研理事会の承認を求めたのではなかったのだろうか。試案の議論という所期の目的を果たしたために続かなかったのではないだろうか。第2次の1987年以降も同じ構図で、先見のある塩見昇先生が近畿地区図書館学科協議会で採りあげ、広く組織立って働きかける正当性を持たせるために日図研理事会を通したのではなかったのか。結果的に早すぎたわけであるが、文部省(当時)協力者会議の作業部会の議論が拙速のように思われることに鑑みると、よかったことは明らかである。2022年の全国図書館大会で次のカリキュラムの議論をしたことが正しいことも、1987年以降の経験から明らかだと思ふ。議論を広く深めて対案を示して建設的に関わるという伝統があったといえるのではないか。

2つ目に、トリックスター。一見奇異に思われる考えを示すことで全体の議論が深まって成果を改善するようなクリティカルな役割を果たすことである。積極的に発表して関わる文化を守るためか、岩猿敏生らは京都図書館学研究会となるグループに分化していったのではなかったか。関東の連中という言い方を聞くことがあったのも、1960年代に東海道新幹線が開通して行き来しやすくなる前から受け継がれているものがあったからではなかろうか。

3つ目に、ミネルバのフクロウ。ものごとの渦中にいるときは見えないものが、一定期間が過ぎると俯瞰できるようになることである。現行カリキュラム策定の議論が固まってから一定時間の過ぎた今が、2回のカリキュラム改訂を振り返る好機であり、また当研究グループの活動について振り返ることについてもいえるのではないだろうか。デジタル化以前の資料が静かに散逸しつつあるなか、デジタル化等で残そうという試みが他にも少なからずある。今回の当研究グループの記念誌刊行が参考になれば幸いである。

図書館学教育研究グループの研究例会への参加

北 克一

(大阪市立大学名誉教授)

私が図書館学教育研究グループの研究例会へ参加させていただいたのは、自分が大学図書館員時代の 1990 年代であったように記憶している。代表幹事は、同志社大学の渡辺信一先生でした。烏丸キャンパス、新町キャンパスは未だ整備されておらず、今出川キャンパスの司書課程資料室が事務局であった。

研究例会は、奇数月の第 4 土曜日午後 14:00 からであった。当時は図書館界全体の東西も不案内で、『図書館雑誌』、『図書館界』などの機関誌や図書館研究会の全国大会への参加・学習などが、情報入手先であった。

今となっては、図書館学教育研究グループの討議テーマをどこまで理解していたのかどうか、心もとなく恥ずかしい限りである。そのような私にも、渡辺先生は紳士然として接してくださり、先達・人格者とはこうした方なのか、と畏敬したことが今も鮮明である。

同研究グループは、2022 年 12 月に例会第 200 回目、及び、結成 50 周年の節目を迎えられる。開催会場の变化、開催方式の变化、参加メンバーシップの变化など、時代の流れを感じる。しかし、こうした時の流れを超えて、2023 年新春から新しい歩み続けられることを願っています。

図書館学教育研究グループに助けられて

前川 和子

(桃山学院大学大学院特別研究員 前大手前大学)

図書館学教育研究グループ(以下、教育研究 G)は、1972 年 12 月日本図書館研究会理事会承認により設立され、2022 年に 50 周年を迎えられましたこと、おめでとうございます。『記念誌』を発行されるにあたり、エッセイを依頼されまして大変光栄に思っております。

京都に教育研究 G あり、と強く認識しましたのは、図書館司書養成科目の見直しの時期に教育研究 G から送られてきたアンケートによってでした。私はその頃大学図書館員として図書館を切り盛りしていたか、司書課程主任教員になったばかりの頃だったのかなのですが、日に日に図書館の経営の重要性を感じておりました。実務者としての図書館員のための「図書館経営論」という科目は何のための科目で、習得すればどのような図書館員を作るのか、を日々模索しているような状況でした。長い図書館員生活を送っていた私は、大学図書館員(短期大学と 4 年制大学)として、いつも職場で最年長でしたので、図書館長との関りも一番強くもっていました。日本においては、図書館長さんはほとんど教員が回り持ちされている管理職です。図書館をよく使っておられてもいなくても、資料提供は受けているが、提供するためにはどのような知識と経験を必要として図書館サービスをせねばならないかは、ご存じない方ばかりとのお付き合いでした。図書館経営をするための知識は、大学図書館においては(ひょっとして公共図書館においても)一番長く図書館で働き、図書館長をサポートする立場の図書館員のために必要なのではないかと思います。この頃、まだこのような明確な意識があったわけではありませんでした。この頃、「図書館経営」の科目が必要であると、熱くこのアンケートに書いた記憶があります。そして、その後驚いたのです。渡辺信一先生と柴田正美先生も「図書館経営」の科目の必要性を強く感じておられたようで、その後公表された次世代の司書養成科目に加えられていたのです。実行力のある研究グループだと、強く認識した記憶があります。なお、この科目の真の狙いは、図書館員が図書館長である場合の経営論であるのはいうまでもありません。

また、図書館員になるには、コミュニケーション力が必要だと考えていましたので、その力や司書としての適性をはかる良い機会としての「図書館実習」に注目しました。横山桂先生(当時 京都産業大学)、中道厚子先生(大阪大谷大学)、川原亜希世先生(近畿大学)(出発点では馬場俊明先生もご一緒でした)と思いが同じでしたので、

「図書館実習」について全国に悉皆調査し、送り出す側の司書養成の教員、受入側の公共図書館の実態を調べました。この調査内容は、調査研究と(いう意味合いと)同時に、「図書館実習」の必要性を関係者に広く知って頂くということを目的にしましたので、発表・講演の機会があれば積極的にお受けしていました。教育研究 G から発表のお誘いを受けまして、2008 年 2 月 2 日(土)同志社大学において前川が発表させて頂きました。テーマは「『近畿地区大学図書館における司書採用の現状』の資料から」(第 121 回教育研究 G 例会)でした。

図書館は常に変化していく有機体であるとは、ご存じの通りですが、その中で働く図書館員も時代・社会の中で積極的に情報提供を行う専門職として変化し続けるでしょう。また自身と専門職の身分、待遇、働く場である図書館を守るための力も今後必要になってくるでしょう。その図書館員を養成する教員の感性・知識は益々将来を見通す力が求められていくことになると思われます。教育研究 G への期待が今後も高まっていくことは必定で、さらなるご発展を心から期待している次第です。

個人的な思い出

漢那 憲治

(沖縄国際大学南島文化研究所特別研究員)

まず、日本図書館研究会(以下、日図研)との関わりについて述べたい。1973年にシカゴ大学極東図書館で日本語課資料課主任として勤務していた時、院生が日図研について修論をまとめようとしていた。彼へのレファレンスサービスを通して日図研についての知見をえた。沖縄に帰省後、初めての論文を投稿し採用され、1974年の『図書館界』(第26巻第3号)に「教育への学校図書館統合の問題と障害についての考察」が掲載された。さらに、その年の10月23日に開催された第16回研究大会(於:静岡県)で「学校図書館に対する教師と司書教諭の意識構造」のテーマで発表した。そこで、武内隆恭さんと遠藤英三先生との知己をえた。遠藤先生は日本学校図書館協議会の『ニュース速報版』に取り上げてくださった。武内さんとは長い付き合いが始まった。

2000年4月、梅花女子大学に阪田蓉子先生の後任として赴任した。そこから同志社大学で非常勤講師として勤めるようになり、渡辺信一先生のお誘いでこの図書館学教育研究グループに参加することができた。研究グループの例会に出席したり、発表したりすることを通して研究仲間の輪が広がった。その中で柴田正美先生が研究例会で、渡辺先生をサポートされ例会をとりまとめていたのが印象に残っている。研究例会には岩猿敏生先生がしばしば参加され、先生の貴重なコメントなどには刺激を受けたことを思い出す。岩猿先生とは第2回日米大学図書館会議(ラシーヌ in Wis、1973)で初めて出会い、それ以来、先生の親炙に浴してきた。

研究例会において発表者に質疑応答をする中で、研究方法や調査のあり方、または専門用語等についての表現や解釈等についての知見をえて、参加者からの質疑応答を深める機会でもあった。その中で、特に印象に残っているのが、田窪直規先生を知り合うきっかけになったある女史の発表の質疑で、言葉の解釈が話題になり、田窪先生と私の解釈が一致したことで意気投合したことである。確かアンケート調査の発表であったと記憶している。問題は英語で調査・研究の用語を巡っての議論であった。即ち、“Survey”と“Research”の用語の使い方であった。アンケート調査の発表なので、“Survey”であるはずである。ところが、女史はかたくなに“Research”であると主張したのである。ちなみに、両語とも「調査、研究」の意味が含まれているが、“Research”には「研究」に重点が置かれている。このように、ささいなことではあ

るが、研究発表には語彙の表現の仕方にまで気を配る必要があることを教えられたのである。一方、日図研の研究大会でグループ発表を準備する際に仲間との協働作業を通して研究結果のまとめ方や発表の仕方等についての学びを深めることができた。

図書館学教育研究グループに参加しての楽しみは、研究例会後の打ち上げ(二次会)を渡辺先生の音頭で懇親の場が持てたことである。渡辺先生のおかげで同志社大学学校図書館研究会にも参加でき、大城善盛先生と渡辺先生を中心に立ち上げた岩猿研究会のメンバーとなり研究を深めることが出来たことは幸運であった。よって、研究グループに参加することで研究の刺激を受け、かつ研究仲間の輪が広がるのでおおいに参加してほしい。

図書館学教育研究グループへの期待

糸賀 雅児

(元日本図書館協会教育部会部会長、元慶應義塾大学文学部)

図書館学教育研究グループのこれまで半世紀にわたる歩みは、お二人の回想文¹⁾からおおよそを知ることができる。それによれば、グループの主たる活動内容は、司書講習ないし大学司書課程における資格付与のためのいわゆる「省令科目」の構成とその教育方法に関わるものであった。これには、近年の学校図書館法改正にともなう学校司書のモデルカリキュラムへの取り組みも含めて考えてよい。

一方、2006年度に文科省委託調査として実施された報告書では、全国の公立図書館に勤務する司書4,087人からの回答をもとに、彼らの業務内容が「雇用形態」「勤務年数」「司書資格取得時期」の三つの視点から分析されている。²⁾

そこでは、図書館での雇用形態が常勤化するにつれ、また勤務年数が長くなるにつれ、業務内容が貸出・返却・配架作業から選書や管理的業務へと移行していく傾向がはっきり見てとれる。また、司書資格取得時期や取得方法の違い(通学課程、通信課程、司書講習など)は業務内容にほとんど影響していない。さらに、どの時点の省令科目で司書資格を取得したかもあまり影響していない。どうやら司書課程間の格差(大学間格差)よりも、能力を基盤とする個人差のほうが図書館での業務や職位に与える影響は大きいようである。

その理由として、司書有資格者の採用にあたって、専門職採用であれ一般行政職採用であれ、採用試験(多くの場合、筆記と面接)によって選考されており、そこで一定の「質の担保」がなされているからだと考えられる。この選考(質的コントロール)の仕組みが存続する限り、資格取得時点では基礎さえできていれば、あとは本人の能力と性格、そして研鑽努力に依存する部分が大きいようである。

したがって、今後は資格付与のための省令科目のあり方よりも、図書館に職を得た後のキャリアデザインを意識させ、自己の能力開発を奨励し、研鑽努力を評価する仕組みに多くの教育資源を割いたほうが効果的ではないだろうか。

そのためには、改めて図書館情報学教育を広い視野からとらえ直す必要があり、筆者はかねてより、以下の四つの領域に分けて考えることを提案してきた。³⁾

A: 図書館利用教育(一般学生・市民を対象)

B: 資格付与のための教育(司書・司書教諭課程が中心)

C: 学問領域としての図書館情報学教育 (大学院での指導者養成を含む)

D: 現職図書館員のリカレント (学び直し) 教育 (職員研修を含む)

従来、領域 B を中心に量産されてきた司書を、能力とキャリアに応じて適切に振り分ける社会的な仕組みを整備するため、上の四領域における資源配分の見直しを進めることが現実的である。現在、各地に存在する図書館情報学教育機関は、その教育理念やスタッフの規模、そして何より地域や周辺教育機関の実態に応じて、領域 A～D のいずれに重点をシフトさせるべきか見直すのである。⁴⁾

今後の図書館学教育研究グループにも、そうした見直しを支援できるような研究活動が望まれる。それによって、量的にはひき続き領域 B が中心であっても、社会人大学院の整備や日本図書館協会認定司書への申請などを通じて、質的には C や D への資源配分が拡充され、大学院での養成に匹敵する仕組みに改編されていく道すじを期待したい。

注)

- 1) 渡辺信一 “図書館学教育研究グループ” 図書館界, vol.48, no.4, p.240-1, 1996 年.
高畑悦子 “図書館学教育研究グループの 25 年” 図書館界, vol.73, no.4, p.266-7, 2021 年.
- 2) 日本システム開発研究所 『図書館職員の資格取得及び研修に関する調査研究報告書』 2007 年, 229p.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/07090599.htm
- 3) 糸賀雅児 “平成の司書養成を振り返る” 図書館雑誌, vol.113, no.5, p.272-5, 2019 年.
- 4) これを裏付けるような上田女子短大や松山大学等の地方大学を含む国内 6 大学での履修証明プログラムの開講、そして九州大学や同志社大学での社会人大学院の開設、さらに認定司書制度などの動きについて、次に詳しく紹介されている。
川原亜希世 “図書館員の養成と研修” 図書館界, vol.70, no.1, p.157-167, 2018 年.

大学基準協会の図書館・情報学教育基準について

高山 正也

(慶應義塾大学名誉教授 (株) ライブラリー・アカデミー塾長)

「図書館界」48巻4号記載の日図研50年史に記載された図書館学教育・研究に関する活動の要録によれば、日図研も1980年代の半ばごろから、図書館学教育問題に関心を寄せ始め、1988年2月には「司書養成科目〈省令〉改訂について」をテーマに研究会を開いている。

そこで、本稿では1980年代を中心に、筆者(高山)が図書館学教育の改善に関与した大学基準協会の「図書館・情報学教育基準」の紹介を中心に述べてみたい。

ただ、当時の図書館・情報学会や図書館学教育部会に関わった筆者の関係記録等は当該学協会関係者の無関心さにあきれはて、関係資料の保存価値はないと断定し、ごく最近までは保存していた資料類も既に全て処分して、手元には無い。そこで、以下では、筆者の記憶を頼りに記述することをお断りする。

先ず、筆者の個人的な履歴の回顧からになるが、1969年当時、世間は全共闘と呼ばれた過激派大学生を中心とする大学紛争で、主要大学は学園封鎖、授業停止、東大では入試すら行えないなどの状況下にあった。’70年4月から、文学部助手に就任予定であった筆者は騒然とする大学や世間を他所に、修論のまとめに勤しんでいた。ところが’70年2月末になり、急に大学側から、大学内外の混乱のため’70年度の新規採用の中止が通告された。大学が正常に戻るまでには1~2年はかかるだろうから、それまで待つてほしいとのこと。待つのはいいとしてその間何をするかと尋ねたら、要するに「浪人して、待つてくれ」である。この能天気な返答には正直、反感を感じた。そこで、大学を離れ、某メーカーの技術系専門図書館に就職した。そして時は流れ、’76年度から大学に呼び戻され、授業を担当させられることになり、その年度半ばの10月に、助手任用の辞令が出た。授業以外の助手としての当初の仕事は澤本孝久教授の大学基準協会における「図書館学教育研究委員会」のお手伝いであった。お手伝いの内容は澤本教授のいわゆる「鞆もち」と会議での議事録作成である。委員会は澤本教授が委員長で、裏田武夫(東大)、大塚明郎(応用光学研)、桜井宣隆(図書館短大)、長山泰介(医薬情報センター)、浜田敏郎(慶大)、深川恒喜(武蔵野女子大)、藤原鎮男(東大)、前島重方(国学院大)、室伏武(亜細亜大)の各先生方、計10名で構成され、昭和49~52年にわたり、20回の審議を経て、「図書館・情報学教育基準」、「図書館・情報学教育の実施方法について」をまとめた。これら二つの成果について

は(財)大学基準協会の「会報」第35号(昭和52年12月号)に詳しく報告されている¹⁾。

因みに、図書館・情報学教育基準は、昭和29年4月の図書館学教育基準を改定して、専門教育科目を専攻科目と関連科目に分け、専攻科目は、次の四部門と図書館・情報学実習(2単位以上)を通じて38単位以上を履修するものとされた。そこに示された専攻科目の内訳は次の通り。

1. 基礎部門; (図書館・情報学概論、図書館史、社会と図書館、学術の発達・普及と図書館等を6単位以上; 必要に応じて実験または演習行う。)
2. メディア・利用(資料・利用=筆者註=)部門; (資料論、参考調査資料論、同演習、ユースタディ等を8単位以上; 必ず実験または演習を行う。)
3. 情報組織部門; 情報組織論、分類・目録法、同演習、情報検索等を8単位以上; 必ず実験または演習を行う。)
4. 情報システム(制度・運営=筆者註=)部門; 情報システム論、図書館制度運営論、図書館機械化論等を8単位以上; 必ず実験または演習を行う。)
5. 図書館実習(2単位以上)を必修とする。

当時、図書館法に基づく司書資格取得のために司書講習での所要単位数は必修科目18単位と選択科目2単位、計20単位以上取得すれば資格が取得できていた。(2012年度以降は、これが必修22単位、選択2単位の24単位に代わったことはご承知の通り。)

この基準協会の教育基準は大学基準協会の性格上、日本のアカデミズムの視点に則り作成された。しかし、日本の図書館界はアカデミズムの視点には疎く、この基準を無視して、図書館法司書課程準拠の教育内容での司書養成にこだわった。その結果、今日に至るまで、日本の図書館学、図書館情報学はアカデミズムの世界で、正当な位置や処遇を与えられていない、と言える。

個人的な回想に戻れば、7年弱のブランクの後に大学に戻ったので、リハビリのように、海外留学に出るべくフルブライト奨学金の若手大学研究者の枠に応募したところ幸いにも合格して'82年から、米国に留学し、83年末に帰国した。帰国すると、中村初雄教授が当時手掛けておられた、(株)樹村房での日本語による初学者向け図書館学教科書シリーズを手伝ってほしいとの要請があった。留学中、米国のプロフェッショナル・スクールである図書館学校の授業実態を、留学先のカリフォルニア大学、バークレー校をはじめ、数大学で見て回っていたが、それを忠実に当時の日本の大学

で実現することは極めて難しいと感じていたこともあり、日本語での良い教科書をつくることは、日本の図書館学の教育環境整備の基礎の一つと考え、お手伝いすることとした。中村先生は私と入れ替わる形で、お引きになったが、国学院大でご健在であった前島先生と前島先生亡きあとは、若手で、気鋭の図書館情報学教育関係の方々のご協力の下、今日まで継続できている。

1990年代以降も日本図書館学会(当時)では会長の岩猿敏生先生に筆者は常任理事としてお仕えした。岩猿会長も日本の図書館学の主流を自負する司書講習課程教育は根本的な改善が必要と考えておられたようであった。また日本図書館協会の図書館学教育部会についても触れたいが、すでに与えられた紙数が尽きているので、それらのことは稿を改めたい。

ともかく、世はリカレント教育全盛である。日本の社会教育の伝統を受け継ぐ基本的インフラとしての図書館を発展させるべき、「図書館情報学」教育の一層の発展を期待して筆を擱く。

註

- 1) 財団法人大学基準協会. 会報. No.35 (1975,12), 93p.

「状況に埋め込まれた」学びの共同体としての 研究グループ活動

枝元 益祐

(京都外国語大学)

図書館学教育研究グループが日本図書館研究会に設置されたのが1972年のことであるという。この1972年は、激動の時代といわれる昭和史の中でも転換点にあたる年である。戦後の占領下政策が続いていた沖縄が本土復帰するだけではなく、日中の国交正常化、札幌オリンピックの開催など第二次ベビーブームと相まって国全体の活気と希望が明確に具現化する年であった。そのような年に、日本図書館協会は4月30日を「図書館記念日」と設定した。これはアメリカやイギリスと比較して日本の図書館での蔵書数や貸出冊数が極端に低い(1972年4月30日付朝日新聞朝刊)ことを受け、日本の図書館界を盛り上げようとの意図であった。このような、まさに時代の転換期に図書館学教育研究グループが発足し、その後50年に渡り歴史を刻んできたということができる。(全くの蛇足であるが、枝元がこの世界に誕生し、その人生の物語を始めたのもこの1972年のことである。)

この図書館学教育研究グループが綴る歴史の物語の中に枝元がかかわることになるのは大学院生のときである。指導教官である渡辺信一先生に連れられて図書館学教育研究グループに参加したのが最初であった。ただただ萎縮しながらも研究発表や意見交換に耳を立てながら教科書や論文などは全く異なった学びの場であることに驚きと興奮を禁じ得なかったのが強い印象として残っている。その頃の記憶は、まるで映画のワンシーンを見るかのように鮮明によみがえるが、右も左もわからないばかりではなく、口のきき方さえも不躰な枝元を温かく受け入れてくれたことに感謝している。岩猿敏生先生や石塚栄二先生、柴田正美先生など枚挙に遑がないが、文献で目にしていた人物が目前にいることの驚きと共にそのような場に参加させて貰っていることを裏切らないようにしなければならないと自覚する場でもあった。

職を得て後、数年間ではあるが図書館学教育研究グループの記録編集幹事を担当する機会を得た。各研究発表を注意深く記録し発表原稿としてまとめた後に発表者に返し、誤解や漏れがないかを確認してから図書館学教育研究グループ研究例会報告として編集して日本図書館研究会発行誌『図書館界』へと寄稿する役割であった。この期間は自分の専門分野以外の、しかも最前線の研究発表に触れることで、自身の理解を拡張・深化させる絶好の機会であった。自身の領域ではない専門用語や異なる分析背

景、社会的文脈に触れながら、それらを余すことなく文章化すべく綿密に確認調査をする中で、発表者の研究活動や歴史的背景を迫体験している感覚であったことを覚えている。

さて話は少々変わるが、レイブとウェンガー (Jean Lave & Etienne Wenger) による著書 (『状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加』福島真人解説、産業図書、1993) がある。これは学習を、教育者と被教育者という二項対立構図で行われる教授法 (pedagogy) 的な知識伝達型モデルで捉えるのではなく、共同体の一員としてその活動に参加することによる「関係性からの学び」として想定している。つまり、共同体の一員として最初は周辺的な位置から参加して次第に中心に向かっていく社会的状況としての実践活動の中での気付きや成長を学習の本質として捉えたのである。このような共同体での活動には教科書や手取り足取り指示を出し面倒をみる教育者も存在しない。そのため、見様見真似で試行錯誤しながら他のメンバーが行っていることを実践してみて、次第に周囲に認められ大きな仕事を担っていくという、いわば徒弟制度のような学びの在り方に着眼している。それは知識や技能を教えて貰うということではなく、共同体内に存在する実践活動や考え方、メンバーの人生の物語としての文脈や背景など身体に根付いた行動様式に触れ迫体験することで自身の成長へと繋げる学びの在り方である。

このように考えると、図書館学教育研究グループは枝元にとって学びの共同体であり、その実践活動はまさに状況に埋め込まれた学習であったということが出来る。歴史 (History) を、誰かの物語 (His+Story) として捉える考え方がある。つまり、歴史は教科書に載っているのではなく、誰かの物語として刻まれた人生 (Life Story) が歴史であり、この意味で人々の暮らしや生き様の中にこそ歴史があるとする考え方である。図書館学教育研究グループという共同体にかかわった多くの人々の人生としての歴史がある。そしてそれらの人生が集い図書館学教育研究グループの実践活動という大きな歴史の物語を紡いできた。

今こうして 50 年という節目を考えると、大きな歴史として綴られてきたこの物語の登場人物になれたことに幸せを感じると同時に、これからも物語を綴り続けることの社会的な意義を改めて実感するに至った。図書館学教育研究グループの歴史の一端を記すと共に、これからの益々の発展を祈り筆を置くこととしたい。

図書館学教育研究は成り立つか？

小田 光宏

(青山学院大学)

今から 40 年も昔の大学院生のときのことです。どこかのピアホールで、U 先輩と、次のような会話をしました。

U 先輩: 図書館の世界で、図書館学教育に関する発言や記事が、他の領域と比べて多いように思えるけれど、そう思わない？

小田: 言われてみればそうですね。教育学教育とか、経済学教育とか、他の領域では、そんなに話題になっているように見受けられませんね。

U 先輩: しかも、けっこう多くのものが、制度面の改善を目指すものか、授業の実践報告に類するものだよ。

小田: 確かに。内容のほうは、「こうするとよい」といった個人主張に過ぎなかったり、「こんなやり方をした」と言いつばなしで終わったりしている論考も少なくないかもしれません。

U 先輩: 図書館学教育を研究の対象にすることは、可能なのだろうか？

小田: 難しい面はありそうですが、きちんとした方法と手続が用いられれば、成り立つように感じます。あ、これって、授業の受け売りです。

U 先輩: じゃあ、その方法や手続には、どんなものが考えられるかしら。例えば、実践研究を行なったとして、受講学生が満足したから良い授業実践でした、なんて結論を出すやり方じゃ困るよ。

小田: もちろんです。受講学生の能力向上を測定する手法を用いるのでしょね。

U 先輩: そんな手法が、そもそも開発できるだろうか？

小田: ……。

注: U 先輩は、「う」で始まる方ではありません。

図書館学教育を研究することの難しさは、21 世紀を 20 年過ぎても続いていると認識しています。それだからこそ、図書館学教育の発展と向上を目指して、関係者が智慧を寄せ合い、切磋琢磨する場を維持することが何より大切でしょう。

日本図書館研究会図書館学教育研究グループは、そうした貴重な機会を提供する組織です。日本図書館協会の図書館情報学教育部会 (かつての図書館学教育部会) とともに、これまで、図書館学教育の課題を多角的に取り上げ、先導してきたと言えます。

同グループの営みの一つである例会活動が 2021 年に 200 回を越え、また、同グループ自体も 2022 年に結成 50 周年を迎えたのは、素晴らしいことです。

心から、寿ぎたいと存じます。その上で、携わってきた先人各位のご努力・ご尽力に敬意を表すとともに、同グループがますます前進することを祈ります。私自身も、このエッセイ執筆を依頼されたことで、昔話を思い出し、図書館学教育研究に関わる者のひとりであることを、改めて自覚いたしました。編集子のご配慮に、感謝申し上げます。

図書館学教育研究グループと私

田窪 直規

(近畿大学司書課程担当)

以下、いろいろ誤りもあろうが、おぼろげな記憶を一生懸命紡ぎながら、記すことにする。

80年代前半、筆者は脱サラして、今や筑波大学に吸収合併された図書館情報大学に、3年次編入した。ここで、図書館情報学なるものを学んだのだが、私が卒業した大学で学んだものとは、異質に感じた。図書館情報学は実学、ということなのだろうが、実学は学問であって、単なる実務解説とは違う。ところが、その違いが明確でない授業もあった。実務解説は、大学ではなく、専門学校で行うものと考えていたので、「おれは大学に来たんであって専門学校に来たんやないで」と、思ったものである。4年になるときに、大学院ができるというので、学部を中退し、大学院に切り替えたが、単なる実務教育と実学教育は違うという思いは、持ち続けていた。

80年代後半、大学院を修了し、奈良国立博物館で仕事をし、出身の大阪に戻った筆者は、日本図書館研究会の図書館学教育研究グループに、顔を出すようになった。前段で述べたように、単なる実務教育と実学教育は違うという思いを持つ筆者は、いったいどの様な人が集まり、どの様な問題意識で教育の話をしているのか、興味津々だったのである。

このグループには、実にそうそうたるメンバーが、レギュラーで集まっていた。森耕一先生、天満隆之輔先生、塩見昇先生、渡辺信一先生、柴田正美先生らである。残念ながら、実務教育と実学教育は違うという話は聞かなかった。近畿で図書館学を専攻できる大学ができないかという話題が、中心であったように記憶している。筆者は、これらの先生から見ると、群を抜いた若手だったが、よく受け入れてくださったものだと思う。なお、筆者と同世代の佐藤毅彦先生も、ちょくちょく顔を出していたような、記憶がある。

そのうち、渡辺先生、柴田先生が、このグループを中核的に運営されるようになり、当時の他のレギュラー・メンバーは、顔を出さなくなった。以前は、大阪で研究会が行われることが多かったのだが、この体制になってから、渡辺先生の本務校である、京都の同志社大学で持たれるようになった。研究会のメンバーは、引き続きベテランの先生方が中心であったが、若手としては、筆者と佐藤先生のほか、松井純子先生も出席するようになったと思う。

お二人が運営の中心になってからは、図書館学を専攻できる大学ということが、必ずしも興味を中心ではなく、様々な教育に関する話題を取り上げていた。だが、省令科目の改訂が議論されだされた頃から、司書課程の新カリキュラムの話が、中心になったように記憶している(なお、この話題は、大阪で研究会が開催されていた時も、取り上げられていたと思う)。このグループで検討したカリキュラムは、現在の省令科目に、影響を与えたのではないか。

柴田先生が、グループの会誌、『図書館学教育研究グループ通信』を編集し、発送するという労を取られていたのには、頭の下がる思いであった。これは、ずいぶん長く続いたように記憶している。内容が充実しており、筆者は好んで読んでいた。研究会を欠席した時も、これで次回の研究会の開催日・会場を確認して、参加したものだった。

そのうち会誌が発行されなくなり、会誌で開催日時・会場を確認できなくなった。筆者は、『図書館界』を何か月も遅れて読んでいたので、事前に研究会の日時・場所を確認できなくなってしまった。このこともあり、このグループにだんだん参加しなくなった。

95年に近畿大学の司書課程の教員になったが、実務教育か実学教育かという命題は、筆者の頭から離れない。司書課程は、専門学校に置かれているのではなく、大学に置かれているのだから、即戦力を育てるのではなく、即戦力にならないが、様々な応用の効く人材を育てるところだと考え、教育に取り組んでいる。

もうかなり前のことだが、私の同僚の川原垂希世先生が、このグループの代表になったと聞いた。その時に、近畿大学で研究会を開催することを提案したが、残念ながら、近畿大学は、“常打ち会場”にならなかった。

歩み続ける図書館学教育研究グループ

坂下 直子

(神戸女子大学)

日本図書館研究会の図書館学教育研究グループ結成 50 周年を、心よりお祝い申し上げます。

私がグループの例会に初めて参加させていただいたのは、2015 年のことだったと記憶しています。そんなきわめて新参者である私が、歴史と伝統ある研究グループの記念誌に寄稿をとお声掛けいただき、恐れ多い気持ちで一杯です。

公共・大学・学校図書館の現場に身を置き、またある時は小中学校の教壇に立っていた間で、経験をとおして問題意識が芽生え、図書館の魅力と奥深さ、社会的使命について思うところがありました。また光栄にも大学の司書課程・司書教諭課程で授業を担当させていただくことになった私に、「勉強になるから」と先哲が導いてくださったのが、グループとの貴いご縁のはじまりでした。

当時の同志社大学司書課程資料室には、錚々たる先生方がお集まりになっていて、末席で緊張して議論を拝聴したことを、はっきりと覚えています。「あの文献を著された〇〇先生。」「あの方が、教科書の筆者の〇〇先生。」と感激の連続でした。各分野の第一人者となられてもなお、図書館学教育に対する尽きせぬ熱意のもと、さらなる高みを目指して知を追い求める先人の姿に感銘を受け、触発され、自分なりに成長したいとの思いが湧きました。

その後、例会の場所が龍谷大学大宮キャンパスに移り、南麓(重要文化財!)という素敵な学舎で学ばせていただきました。日々の自らの拙い授業や研究を少しでもよいものにするために、拝聴した知見を取り入れることができたこと、時には議論に加えていただけたこと、本当にありがたく、深く感謝しています。それが、ひとりでも多くの図書館理解者を生み、民主的な社会を形成する市民を育て、やがては世界をよりよい方向に創っていくことにもつながるのではないかと思うからです。

ある時、こんな私にも発表のお声が掛かり、第 182 回研究例会で、「図書館の現場と大学教育課程をつなぐ」として、報告しました(『図書館界』70 巻 2 号)。また、モデルカリキュラムにそって、学校司書養成に乗り出している大学等の現状を調査するというグループ研究では、いくつかの養成科目について各大学のシラバスを比較検討するという、興味深いプロジェクトに加わり、わずかばかりの役割を担うこともできました。派生して拙稿を世に問うことをご許可いただいたこと、何もかもが自分自身

にとって有意義な経験でした。

「当研究グループは、研究団体であると同時に運動体としての取り組みも求められるところである」と、大先達が記しておられます(『図書館界』48巻4号)。現在、図書館現場並びに養成課程は岐路に立っていると感じ、よりよい方向へ変革が必要であると考えます。図書館学教育研究グループの貢献が求められていると思えてなりません。「21世紀における図書館員の養成/図書館学教育をめざして、さらに歩み続けねばならない」という当時のお言葉は、今もなお、いきています。

研究グループの立ち上げと近畿地区図書館学科協議会

塩見 昇

(大阪教育大学名誉教授)

図書館学教育研究グループが例会 200 回達成と結成 50 周年を記念して記念誌をまとめようとの提起に際し、その初期に関わったものとして小文を寄せることにしたい。この名称の研究グループは 1970 年代と 1987 年以降現在に至る二期に分かれて存在し、そこには直接の連続性は乏しい。

前半のグループの設置は 1972 年 12 月理事会で、日図協の図書館学教育部会が同年 6 月に公表した「図書館学教育改善試案」についての関西における公聴会を日図研で開いてほしいという要請を受けての検討に連動して設置が承認された。

大学の司書課程を担当する教員も多く加入している日図研では、図書館学教育、図書館員養成は関心の大きいテーマの一つであり、1970 年 3 月に『界』で「図書館学教育」の特集を組み、1972 年 3 月には当時理事であった室伏武さんの「司書講習廃止論」を『界』に掲載したりしてきた。

その室伏さんが部会長を務める教育部会からの要請であったが、理事会では、日図研でやる場合には改善試案の公聴会ではなく、試案も検討素材の一つとした上で、より広く図書館学教育の現状と問題点を考える討論集会とすべきだということでの開催を決め、その中身づくりがまだ就任 1 期目で一番若手の理事である私に託された。

討論集会は 1973 年 3 月 11 日に大阪市立中央図書館で開かれた。大学教員、公共・大学・学校図書館員、さらに利用者(市民)も含めた約 60 名が参加し、次の四つの報告を基に討論された。①図書館職員をめぐる概況、②改善試案作成の意図、③現場ではどんな職員が求められているか、④桃山学院司書講習の現状。教員だけの議論ではなく、養成を含む図書館職員の現況をおさえたうえで、改善試案が出された経緯と内容、現場からの声、改善試案が司書講習の廃止を強調していることから、関西の司書養成で大きなウエイトを占めている桃山学院の講習の実際を大学の側から話してもらおうという構想で一日日程をたてた。このテーマを論じるには幅広い、ユニークな構成だった。(討論の詳細は『界』25 巻 2 号に掲載)。

この集会を具体化する決定と同時に設置された研究グループは高橋重臣さんが提唱者で、室伏さんを支援する意図もあっただろうが、継続する活動とはならず、活動記録もほとんど残されておらず、ほぼ休眠状態を続けた。それがまったく構想新たに再開される契機となったのは 1986 年 12 月の近畿地区図書館学科協議会の席での二つ

の提起である。

この協議会は日図研とはまったく別個の活動であるが、戦後早い時期に日図研の役員(会員)である関西の大学教員の創意で始められ、毎年定期的に各大学持ちまわりで開催し、主に図書館学教育についての情報交流を重ねていた。1970年代半ばには私が提唱して図書館学の授業実践を公表し、交流を図ることを定例化している。この協議会の席上、二つの課題が提起された。一つは近畿地区に学科レベルの図書館学教育の場をつくる可能性を探ろう(森耕一)、もう一つは文部省が社会教育主事の養成カリキュラム改正を準備している情勢に鑑み、司書講習科目の改訂を検討し、実現に向けて働きかけよう(塩見昇)というもので、参加者の賛同で、具体化は日図研の研究グループでやるのがよいという方向性が示され、直後の理事会でグループの設置(形式的には再開)が決定された。塩見事務局長、渡邊信一理事の呼びかけで始動したグループは1987年2月に初会合をもち、二つの課題を軸に研究活動を行うこと、まずは時期的なこともあるので講習科目改訂を先議することとし、以後、渡辺・柴田正美理事(87年度に選出)が幹事役で例会を継続することになった。

生涯学習審議会の図書館専門委員会による1996年4月の「社会教育主事、学芸員及び司書の養成、研修等の改善方策について(報告)」への関与ということでは、グループの研究活動の成果を活かすには、日図協として文部省や審議会に働きかけるほうがなじむことは明らかなので、渡辺・柴田さんが日図協の教育部会幹事になったこともあって、働きかけは教育部会として行い、内容面の検討は研究グループで重ねるといふ、暗黙の役割分担のような形で進め、科目改訂に図書館界としての意見や要望をある程度反映させることに貢献したといえよう。

研究グループの初期は渡辺さんのお世話で、日図研の資料の一部を保管してもらっている同志社大学の司書課程資料室を会場に定例的に開催し、上記の課題と合わせて図書館学教育や図書館員に関連する多岐にわたる研究協議を重ねることになり、大学教員だけでなく多様な会員も参加するようになった。私もかなりの期間は毎回参加していたが、次第に日図協の常務理事や複数の常置委員会の活動等のかかわりが増え、定例会への出席が遠のくようになった。

このグループの存在と活動は、近畿地区図書館学科協議会(こういう活動は他の地区には存在しない)と組織的にはまったく別ものだが、表裏のような関係にあり、いかにも日図研らしい活動で、図書館学教育を多様な構成メンバーで論議できるユニークな場として継続できていると思う。今後ますますの充実発展を期待したい。

コロナ禍の図書館学教育研究グループ

高池 宣彦

(常磐短期大学)

私は図書館学教育研究グループの参加歴が2年程度であり、まことに恐れ多いのですが、寄稿のご提案をいただきましたので、僭越ではございますが自分の参加経験を述べさせていただきます。

私は茨城県水戸市にある常磐短期大学と常磐大学で司書・司書教諭、課題研究(ゼミ)、情報リテラシー、グラフィックデザイン等の科目を担当しています。日本図書館研究会には2020年以前から入会はしておりましたが、遠方に住んでいることもあり、あまり研究会の諸活動に参加はできませんでした。

図書館学教育研究グループの岡田大輔先生には、日本図書館協会図書館情報学教育部会2018年度第2回研究集会「教育プログラムの組み立て方―「情報サービス演習」を例として―」でお会いいたしました。

その後、図書館学教育研究グループの例会がオンラインで開催されていることに気が付き、2020年5月16日(土)図書館学教育研究グループ5月研究例会から参加させていただいています。

私が参加している図書館学教育研究グループの例会はZoomを用いた遠隔会議の形で開催されています。Zoomの音声・ビデオ通話でリアルタイムで双方向的に議論が行われ、画面共有を使った動画・静止画資料の共有や、チャットでの資料配布、URLなどの情報提供、意見交換が活発に行われています。画面共有の機能では、参加者の成果物を共有するだけでなく、その場で調べたこともすぐに共有ができます。チャットは議論を遮ることなくコメントすることができるので、より多くの参加者が積極的に研究会に関与することができます。

私は図書館学教育研究グループに参加するようになって「アフターコロナにおける司書課程の教材作成」(第63回研究大会)「学校司書モデルカリキュラム実施大学シラバスの検討」、「学校司書のモデルカリキュラム科目の教科書調査」等の研究に関わらせていただきました。

経験が浅く、知識も足りない私を研究グループの皆様には非常に温かく迎えいれら

れております。

遠方に住む私にとって、オンラインでの研究会の開催も大変ありがたく、大切なサードプレイスとして心の支えとなっております。グループの皆様に頼ってばかりい
ないで自分も貢献できるようになることを目指しつつ研究グループの今後の発展をお
祈り申し上げます。

大学時代から図書館情報学と関わって、今思うこと

岩崎 れい

(京都ノートルダム女子大学)

私が初めて公共図書館に連れて行ってもらったのは、小学校1年生の時で、ちょうど20世紀後半の図書館の発展期でした。それから40年以上が経ち、図書館をめぐる社会は大きく様変わりをしています。20世紀の後半に求められた図書館と現在のよう
に情報が溢れている社会の中で求められる図書館は、その根本にある理念は同じでも、その機能や図書館司書・司書教諭の専門性は変化を必要としています。

このような時代の中で、気になるのは大学における図書館司書や司書教諭の養成課程です。私たちは、現代の図書館に求められる専門職の養成の一端を担っているのだろうか、大学入学時には図書館で仕事をしたいと言っていた学生が大学3年生になる頃には、狭き門であり過ぎて図書館司書になれる気がしません、と言ってくる就職状況をどうすればよいのだろうか、と日々悩むことばかりです。

しかし、同時に、日本の図書館は図書館法や学校図書館法などの法律の下に設置されており、全国に司書課程もあり、豊富な出版物にも恵まれており、国際的に見ると進んでいる部類に入るのではないかと感じます。2013年から8年間、国際図書館連盟(IFLA)の学校図書館部会の委員を務め、また2021年から同連盟のアジア・オセアニア部会の委員をする中で、日本の図書館は、豊富な資料を安定した運営の中で提供できている方に入っているとつくづく感じるがあります。この現状を土台に、基本理念を保ちながらも、より時代に合う方法で、より利用者のニーズを充足できるように、図書館が発展するために、私たちに何ができるのかを今後も考えていきたいと思っています。

図書館学教育を考える場の大切さ

坂本 俊

(聖徳大学)

私が図書館学教育研究グループに参加するきっかけは、京都女子大学在職時にお世話になった山中康行先生にご紹介いただいたことだったと記憶している。図書館情報学を研究している身として、日本図書館研究会および機関誌である『図書館界』に関しては、所属していた大学の図書館を介して、よく目を通していたものだが、学会に所属するまでは至らなかった。また、研究グループの例会の多くが近畿圏で開催されていることもあり、誌面にて各研究グループの活動報告を見て、興味を喚起されることもしばしばあったが、当時は大学内での立場的にも、時間の面でも住んでいた広島から遠征し、参加するのは難しく歯がゆい思いをしていた。

それでも、勤務大学にて司書資格課程の専門教員という立場であったため、少しでも図書館学教育に関する研鑽を積もうと思いつき、近隣大学の先生方と図書館学および司書科目の教授法や授業改善方法などの情報を共有しあう研究会のようなものを立ち上げ、細々とではあるが、図書館学教育を考える場づくりをおこなってきた。その後、縁あって、京都女子大学に職を得て拠点を京都に移すことになり、同時期に、これまた縁があり日本図書館協会の図書館情報学教育部会に参加する機会に恵まれたこともあり、図書館学教育に対して、本腰を入れた研究に励むべく日本図書館研究会への入会及び図書館学教育研究グループへの参加を決意した。

京都には都合4年、その後、また広島に戻り2年、そこから現職の千葉へと移るなど、私自身の環境は大きく変化してきたが、その間に図書館学教育研究グループも昨今の社会事情を受け、オンラインでの例会開催がなされるなど、新たな取り組みが試みられ、遠方からでも研究グループの例会に参加することが適うようになっている。

ランガナタンの提唱する近代的な図書館の理念として、「図書館は成長する有機体である」ならば、それを支えるためにも、漸次、図書館学教育を発展させていく必要があるだろう。このため、図書館学教育に従事する我々にとって、共に学びあえる場があるということは大いに意義があるものであり、そのような場として、図書館学教育研究グループが創設50年の節目を迎え、現グループメンバーの一人として、関与できるということは望外の幸せである。

もちろんこれまでの様に、グループメンバーが会場に集まり、様々な意見を交わし合う形の例会も必要であろうが、再び遠方に身を置く者として、叶うならば、オンラ

インを併用する形で遠方からでも容易に参加可能な現在の形も継続して欲しいと切に願っている。

ともあれ、図書館学教育研究グループ創設 50 年、おめでとうございます。

省令科目への絶えざる取組と記録作成への表敬

志保田 務

(I-LISS Japan 会長)

国際図書館情報学会日本支部 (International Library and Information Science Society: I-LISS Japan) を起こして 5 年ばかり。その機関誌の編集会議を終えたとき、岡田大輔編集次長から「日本図書館研究会 (NAL) 図書館学教育研究グループの報告書バックナンバーを揃えたい」と言われ、何号かをお届けした。その御縁によつてか、柳勝文同グループ重鎮からグループ記念誌への投稿依頼のメールが届いた。柳教授は I-LISS Japan の会員でもあり、海外発表の任も担って下さった方である。また、ミネルヴァ書房や第一法規から情報資源組織関係でご共著を願った間柄でもある。更に振り返れば、日本図書館協会 (JLA) 図書館学教育部会で私が会長の時期 (2005 – 2011 年 3 月) 幹事を務めていただいた。同部会は、当該 NAL 図書館学研究グループと深い結びつきを有している。この二つのグループは、JLA と NAL という異なる団体組織であるが、渡辺信一・柴田正美両師が長期牽引し、省令の司書養成科目の立案など重篤な貢献を続け、斯界に有効な記録を提供してこられた。その働きは東西に渡りをつけ、全国区的な働きをされた。渡辺先生には、Michael Gorman 講演の翻訳ナレーターをお願いした。親団体 NAL の 50 周年記念式典の晴れ舞台であり、実行委員長を務めていた私は恩義を感じている。先生は NAL でとりわけ国際交流や編集の長として手腕を発揮された。特記したいのは、木寺清一元理事長がつけたとされる機関誌『図書館界』の英語表記 Japan Institution for Library Science に代えて Nippon Association for Librarianship とされた事である。第 37 巻 5 号切替えて、巻号変更としては唐突の感があるが、1986 年の 1 月号からの変更であり、IFLA 東京大会に備えて Librarian を本分と解する日本図書館研究会の存念を示された。NAL と略称もよい。先生には樹村房『図書館概論』(初版)に御執筆頂いた。関係事で近々に蘇るのは同編著仲間のお一人、高橋和子先生のご逝去 (2022 年 2 月 23 日) である。先生は国文学科の卒業で、『芥川龍之介の読書遍歴』などを書いた私によく話して下さった。『司馬遼太郎事典』(志村有弘編、勉誠出版)に、司馬が愛した大阪市立御蔵跡図書館を扱った「図書館」を初めとする執筆項目がある。NAL の傘下で御グループと競い、私の関係先・図書館サービス研究グループや図書館学資料保存研究グループはできていない記念誌を出されることに敬意を表したい。御蓄積の記録に基づく博士論文の出現等も期待したい。

学校図書館利用の思い出

梅原 由美子

(京都市立京都工学院高等学校)

2003年、立命館大学大学院在籍中、関関同立単位互換で、同志社の渡邊信一先生の学校図書館に関する授業を受講。修了後も、同志社関連の研究会やこちらの研究グループに、しっかり寄せていただいた。12学級以上の学校への司書教諭配置や、「総合的な学習の時間」開始で、学校図書館への期待が高まっていた時期だ。先進校の学校図書館見学や授業実践報告などから、大いに刺激を受けた。とはいえ、同じような実践をしているつもりでも、理想どおりは難しい。

2009年、勤めていた工業高校の改築で、新しい建物の1階に図書館が入った。広いフロアはいくつかのコーナーから成り、静かに本を読むだけでなく、簡単なものづくりをする余裕もあった。東日本大震災後の「課題研究」では、司書教諭兼任の図書館長に関連図書の購入を働きかけ、はりきってパスファインダーも用意したが、そこは工業高校。最終的な目標である「ものづくり」にかける時間との配分で、情報探しばかりやっつけられない。油断していると、PCコーナーでゲームに興じたり、フロアの死角で床に寝転がっているやんちゃがいた。

9年過ごした工業高校から出身校に異動した2013年、3年生の「小論文ゼミ」を担当した。場所は図書館だったが、それは空き教室がないため。学習参考書と漫画が目につく大閲覧室は、入口から「静粛」の張り紙。先輩の名前がある貸し出しカードが入った、30年以上前の本。近くの市の図書館を活用しようにも、授業日は休館日。ICT担当教員や司書に協力してもらい、ノートパソコンやプロジェクターは、その都度、閲覧室にタコ足配線で繋いで使用した。司書は、病休代替の若い嘱託実習助手。図書館での授業に関心があって相談しやすかったが、年度末で転職した。「もっとお手伝いしたかった」と言ってもらえたが、退職者があっても、司書資格があっても、正規採用はなかった。

受験準備を意識した講座と思った「小論文ゼミ」だが、選択の第一理由は、定期考査がないから。試験がない分、身近なテーマ設定から相互評価、フィードバックなど、毎回課題を出した。生徒は当てが外れたようだが、17人の少人数で、毎回違う何かをやるのは悪くなかったようだ。ここにも、死角に椅子を並べて寝転がる生徒は時折いたが、要望を受け、「静粛」を無視してディベートをやり、最後はなぜか、映画製作となった。私も「図書館の先生」の役をもらったが、内容が変わって出番がなく

なったのは残念だ。

ここ数年、校務分掌再編により、「図書館長」は消えつつある。図書主任や司書が、他の業務を兼務している。一人一台タブレット所有と Wi-Fi 環境整備が進み、図書館や PC ルームへ足を運ばなくても、複本や公共図書館との連携がなくても、必要な情報が行き届く。これまで授業での図書館活用を意識してきたが、授業に結びつけすぎて、図書館の敷居が高くなってはいけない。

先日、探究型授業で行き詰ったグループが、3 時間連続授業の 2 時間を図書館にこもり、全く違う分野の本からヒントを得て、晴れやかな顔で帰ってきた。改めて、学校図書館の役割を考えた。

図書館学教育研究グループ 50周年記念誌

2023年2月18日発行

定価 500円

2023年3月27日修正 web版発行

編集: 日本図書館研究会 図書館学教育研究グループ

発行: 日本図書館研究会 図書館学教育研究グループ

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67 龍谷大学柳勝文研究室

TEL+FAX: 075-791-6791 yanagi@let.ryukoku.ac.jp

振替: (日本図書館研究会図書館学教育研究グループ) 14410-42815391

本書の内容は日本図書館研究会の公式サイトで公開しています。